

[49] Crossover

<https://hdl.handle.net/2324/7326124>

出版情報 : Crossover. 49, pp.1-, 2024-03. Graduate School of Integrated Science for Global Society, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



CROSSOVER

No.49 March,2024



ISGS

九州大学大学院

地球社会統合科学府

Graduate School of Integrated Sciences for Global Society

Contents

巻頭言

地球社会統合科学府設立十年目を迎えて	大野 正夫	1
--------------------	-------	---

新任教員紹介

型どおりのような毎日	土屋 智行	2
言われていないこと(what is unsaid)の世界	大津 隆広	3
留学生と共に	大神 智春	4
歴史学研究法概論	木土 博成	5
それって何の役に立つの?	渡部 哲史	6
そうだ調査、行こう。	福田 千鶴	7

受賞報告

留学生教育学会 第12回優秀論文賞	渡部 裕子	8
日本蜘蛛学会 学生発表賞を受賞して	相知 紀史	9
日本文化政策学会第2回学会奨励賞を受賞して	高久 彩	10
九州考古学会奨励賞 受賞報告	松尾 樹志郎	11

自著を語る

From Japanese Empire to American Hegemony: Koreans and Okinawans in the Resettlement of Northeast Asia	マシュー・オーガスティン	12
〈(社会)考古学〉を生きること: 『社会考古学講義:コミュニケーションを最小基本単位とする考古学の再編』について	溝口 孝司	14
『近世日琉関係の形成—附庸と異国のはざまで—』	木土 博成	16
『フレーム意味論とフレームネット』の刊行に寄せて	内田 諭	17

十周年企画

比文歴史資料情報講座研究集会	伊藤 幸司	19
文学系総合演習から巣立った卒業生との交流会	東 英寿	20

アクティビティ

水共生学活動報告「ラムサール条約釧路会議30周年記念シンポジウム」 および霧多布湿原巡検(バスツアー)	藤岡 悠一郎	22
水共生学 一般公開企画の開催 「石垣島未来ワークショップ・水共生学セミナー」	渡部 哲史	24
未来共創リーダー育成プログラム 令和5年度授業の紹介	佐藤 敦郎・荒谷 邦雄	26

博士論文を書き終えて

博士論文を書き終えて1年	岡 祐輔	30
--------------	------	----

大学院データブック

地球社会統合科学府 令和五年度 修士課程修士論文題目一覧		31
------------------------------	--	----

表紙の説明

ロゴマークは、「地球社会統合科学府」の6つのコースを表わしています。すなわち「地球社会統合科学府」そのものです。本学府の理念にある「現場主義の精神」、「フィールドワークによって諸問題を究明する」姿を、ロゴマークが地球規模の遥かなる未知の領域へと飛び立つ姿、または、地球と地域をリードしていく姿の象徴として表現しています。

地球社会統合科学府設立十年目を迎えて

大 野 正 夫

(地球社会統合科学府 学府長)



地球社会統合科学府は2014年に設立され、今年設立十年目を迎えました。その前身は1994年に設立された比較社会文化研究科に遡ります。比較社会文化研究科の設立から数えると三十年目になります。

地球社会統合科学府は「地球社会的視野に立った統合的学際性」を教育の理念に掲げています。すなわち、一つの専門分野に閉じこもるのではなく、文系・理系の枠を超えた統合的な学際性に立脚して様々な研究課題を究明するような人材を養成することを教育の目標として掲げています。この目標を達成するための仕組みとして、修士課程では6つのコースを設定し、その中からメイン・サブのコースを選択する仕組みになっています。図をご覧くださいと、右側に6つのコースが、そして中央には学府で取り組んでいる研究テーマのキーワードの例が並んでいます。上から惑星地球そのものを対象とするテーマ、その地球で暮らす生物に関するテーマ、そしてその生物の中でも人間に注目して、人間の社会・文化の様々な側面に関するテーマが掲げられており、この図はそれらの研究テーマが緩やかにつながっていることを示しています。さらに左側には各コースの研究対象が示されていますが、地球そのものから、世界、国、都市、コミュニティ、家族、と様々な階層の研究対象が並んでいます。この図は学府設立時に使われていたものを基にイラストをリニューアルしたのですが、多種多様な専門の教員・学生の集まりである地球社会統合科学府の一体感を良く表わしていると思います。

この他にも目標達成のためのさらなる仕組みとして、特に修士課程ではコースワークを重視し、基礎から応用への積み上げを意識した多彩な授業科目をそろえ、諸課題に学際的にアプローチできる能力・スキルを身につけられるカリキュラムを提供してきました。2020年度からは、本学府の看板授業である「地球社会統合科学」を大学院版のPBL (Problem-Based Learning) 科目に組み換えました。専門分野の異なる学生がグループを作って協働して課題に取り組み、統合学際的アプローチを実践的に学ぶ授業として高い評価を得ています。

もちろん、本学府でも修士・博士の学位論文の執筆は学習・研究

の一つの到達点を示すものとして重要です。ただここでも、個々の学生が設定する研究課題には、他のディシプリン優先型の大学院には見られない広がりやユニークさ、分野横断型のテーマが散見されます。学府を構成する教員も多様な学問分野を専門とし、学際的な研究指導を実施します。

なお、地球社会統合科学府は、発足と同時に二つの大きな教育研究事業を合わせて展開してきました。「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」と「フューチャーアジア創生を先導する統合学際型リーダープログラム」です。いずれも、事業としては終了しましたが、そこで繰り広げられた数々の国際シンポジウム、ワークショップ、国内外でのフィールド調査実習等は本学府の学生を有為な人材に育成するうえで大きな力となりました。

そしてこれらの事業の成功を背景に、2021年に「未来共創リーダー育成プログラム」がスタートしました。九州大学の複数の学府が協力して設置した文理横断の副専攻型プログラムで、地球社会統合科学府が基幹学府を務めています。本学府の学生は、このプログラムを副専攻として選択することで、より学際的、実践的に研究活動の世界を広げることができるでしょう。

以上のように、九州大学地球社会統合科学府は、他のディシプリン優先型の大学院には見られない広がりやユニークさを武器に、広く社会で活躍する研究者・高度専門職業人を育成する教育を展開しています。この「クロスオーバー」や大学院案内誌、ホームページ等でこれらの活動をご覧になって興味をお持ちいただき、ご理解ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



型どおりのような毎日

土 屋 智 行

(地球社会統合科学府 言語・メディア・コミュニケーションコース)

私達は、一日の生活に合わせてルーティンを定め、それに従って生活している。起床してから仕事や勉強や遊びをこなし、人とコミュニケーションを取り、食事をし、就寝するまでに、社会の中の様々な慣習や、自分の中の決め事に従い、決まった行動の流れをこなす。私も週に3回は5時前に起床し、ジムで身体を動かす。そして平日は我が子を学校へ送り出し、大学で担当科目の準備や、学務関係の仕事に加え、「定型表現とその拡張用法の言語学的分析と考察」という研究テーマに取り掛かる。週末は少し遅めに起き、コーヒーを飲みながら家の事や仕事をこなしたりする。日常のルーティンは厳密なものにも、いいかげんなものにもできる。分刻みで決めることもできるし、順番を入れ替えることもできる。このような「変幻自在な行動の型」は、人間の驚くべき適応能力の賜物だと、私は思っている。

この「型」は、コミュニケーションにも現れる。人は家族を最小単位として、様々な規模の社会集団で生活し、コミュニケーションを取っている。私達はそれらのコミュニケーションを通して、それぞれの集団で共有されている無数の表現を学ぶが、その表現は語の単位を超えて、句や節、文のレベルに及ぶと想定される。例えば学校では「分度器」「三角定規」等の語ではなく「先生おはようございます。皆さんおはようございます。」や「皆さん一緒に、いただきます。」等のまとまった表現を覚えるし、国語の授業でも慣用句やことわざを習う。校歌の歌詞やスローガンもある。このような「まとまりとして記憶され、使用される表現」を「定型表現」と呼ぶ。

我が子も、土屋家という最小単位の社会の他に、学校や習い事、親戚の集まり等、複数の社会集団を忙しく出入りし、それぞれの集団内で使われている定型表現を学んでくる。時には、我が子の威勢の良すぎる言葉遣いに啞然とする瞬間もある。一体どこで覚えてきたのか…。なので私は、我が子がお友達と良好な関係を築けるように、土屋家になるべく丁寧な言葉遣いで満たすよう努め、妻も、職場で身に付けたゴールドランクの応対品質で我が子に接してくれている。

さて、このように多くのコミュニティで共有・記憶され、使われる定型表現だが、ただ記憶され、使われるだけではない。文脈や状況に応じて、少しずつ拡張（もしくは逸脱）がおこなわれるのだ。たとえば、子供達の間で人気の歌の歌詞はすぐに変えら

れるし、ネット上でも流行語がネットミーム化し、改変され、再生産されている。我が子も夕食後に宿題をこなしながら、アニメや漫画、教科書等の台詞を言い換えたり混ぜ合わせる遊びをしている。人は表現を定型的に記憶し、遊び、ふとした瞬間に見つかる面白さに、言葉の創造性を見出すのである。

我が子を布団に連れて行き、寝かしつける時に「学校の標語とかスローガンとかあるよね？それ覚えてる？」と訊くと、我が子は「えー、『やさしい』とかあったかなー」と呟きながら少し考えた後、「忘れちゃった」と笑うと、すやすやと寝息を立ててしまった。そうか、忘れたか…。代わりに覚えてきたのが、あの言葉遣いか…。親の期待は華麗に打ち碎かれるものである。しかし、これも我が子の成長の一過程である。我が子を取り囲む言語環境と、言語の記憶と忘却に関わる認知プロセスは、複雑である。



言われていないこと (what is unsaid) の世界

大 津 隆 広

(地球社会統合科学府・メディア・コミュニケーションコース)

(言語文化研究院 言語環境学部門)

シェークスピアや英文学を学ぼうと大学に入学した私は、恩師である寡黙な指導教授の授業を通して、人間とことばの関係の本質を探りたいと考え、言語学の中の語用論という分野へ足を踏み入れました。大学院時代、そのことば少ない指導教授からは多くの情報を教えていただきました。その中でも、伝達された発話（当時は発話という語用論の分析の単位など知りませんでした）の意味解釈には一定のプロセスやルールがあるという講義は、語用論の知識が乏しかった私の知的興味を掻き立てるものでした。そのプロセスやルールが何であるのか、人間の認知の仕組みを自分なりに色々と考えながらここまで来たように思います。

語用論の研究対象は、全てとは言いませんが、話し手により発話の意味がどのように構築され、聞き手によりそれがどのように解釈されるかにあります。発話の意味は、「言われていること」(what is said)と「言われていないこと」(what is unsaid)に大きく分かれます。これらは発話の意味の明示性 (explicitness)・非明示性 (implicitness)と直接的に結びつくわけではなく、「言われていないこと」の中にも明示的な意味が含まれますし、もちろん含意 (what is implicated) のような全くの非明示的な意味もあります。人間のコミュニケーションを考えてみれば、「言われていること」よりも「言われていないこと」の方が意味の多くを占めますし、多くの場合、「言われていないこと」を理解する方がより重要であると実感します。発話の意味における「言われていないこと」の世界の方がはるかに興味深いものです。

「言われていないこと」を確定するためにはコンテキストの情報を用いた推論が必要です。人間の伝達行為は特別な意図がなければ通常ミニマルに行なわれます。「食べた？」という簡単な例において、言わないことも含めて、言われていないことがいくつかあります。「あなたは」や、例えば「今日の昼ごはんを」は、コンテキストの情報（誰に対する発話か、いつ発せられたものか、など）をもとに推論により確定される明示的な意味だと言えます。解釈のための推論は発話のインプット時からオンラインで行なわれますので、さらにコンテキストの情報（話し手と聞き手の関係性など）を用いて、ランチへの誘いや体調への心配など、非明示的な意味であるさまざまな含意の計算が行なわれます。

推論のプロセス（発話解釈にどのような推論を用いればよい）自体を意味としてコード化している言語表現は手続き的表現 (procedural expression) と呼ばれます。その典型的な言語表現である談話標識 (discourse marker) やフィラー (filler) などは、近年、語用論研究の重要なトピックとしてしばしば議論されるようになりました。語用論研究の本質はデータ主義にあります。言語現象や言語データに対して、「言われていないこと」にまで心を研ぎ澄ますことで、人間の認知がどのように行なわれているか、少しずつわかるかもしれません。



担当科目

言語コミュニケーション学A (認知語用論)

総合演習 (言語・メディア・コミュニケーションコース) A

留学生と共に

大神 智 春

(留学生センター)

(言語・メディア・コミュニケーションコース)

2023年度から地球社会統合科学府言語・メディア・コミュニケーションコースの兼任教員となりました、九州大学留学生センターの大神智春と申します。留学生センターでは20年以上教鞭をとっていますが大学院では新任教員となります。どうぞよろしくお願いいたします。

高校生の頃から語学教育や異文化間コミュニケーションに興味を持っていました。それで日本語教育について学ぶことができる関東の大学に進学したのですが、当時はバブル経済が最後の輝きを放っていたこともあり、学部卒業後は周囲に流されるように一般企業に就職しました。しかし数年務めてみたものの日本語教師になることが諦めきれず、自分の将来について改めて考えるようになりました。そんなある日、九大大学院の比較社会文化研究科(比文)に日本語教育講座があることを知りました。それがきっかけで比文の修士課程に第4期生として入学することになり、日本語教育に再挑戦することになりました。修士課程修了後は中国の東北師範大学に赴任し日本語教育を行いました。この期間には研究者及び大学教員としてのキャリアを積みとともに自分が異文化環境に置かれるという貴重な経験をすることができました。その後の研究につながる人々との出会いもありました。日本帰国後は九大の留学生センターに着任し、それから20年以上留学生に日本語教育を行いながら研究を続けています。また、当センターで教鞭を取りながら博士論文を執筆し、「論文博士」として博士号を取得しました。

日本語教育の中での私の専門分野は漢字・語彙教育とコロケーションの習得研究です。コロケーションは日本語学の分野では「連語」とも呼ばれています。日本語学習者がコロケーションをどのように習得していくか、コロケーションの習得にはどのような要因(例えば日常的な使用頻度、学習者母語の影響など)が関わっているかについて研究しています。留学生センターで上級レベルの学習者に漢字と語彙を教えていると、個々の語はよく知っているのに「私は悪い気分があります」などのように不自然な表現を用いる学生が少なからずいます。日本語では「悪い気分がある」は不自然な表現です。これは母語話者の視点で考えると適切なコロケーションを習得していないための誤用だと考えられます。しかし、学習者の視点に置き換えると、この表現は学習者が独自に築き上げたコロケーションに関する知識の一部で

あると考えられます。

また、例えば「切る」という動詞は辞書等では「野菜を切る」「縁を切る」「(記録が)10秒を切る」「(右に)カーブを切る」のような意味用法を持つ多義動詞であるとされています。多くの学習者にとっては、「野菜を切る」のように基本的な語義によるコロケーションの習得は比較的容易ですが、「(記録が)10秒を切る」のような派生的な語義によるコロケーションの習得は困難な場合が多いです。ただし、どのような語義が「基本的」でありどのような語義が「派生的」であると感じているかは母語話者と学習者では一致しているとは限らず、母語話者からみると「基本的」あるいは「基本的」に近く習得が容易だろうと思われるも学習者は「基本的」だと捉えていない場合もあります。

そこで、コロケーション習得を学習者の視点から見直し、学習者が習得途上でどのような知識(「中間言語」と言います)を構築しているか、知識構築にはどのような要因が関わっているかを明らかにすることを目指しています。将来的には語彙学習教材を作成するなどして研究で明らかになったことを日本語教育実践の場に還元していきたいと考えています。

日本語教育の分野に求められるものは教育を支える研究と教育実践の両者であると考えています。この両者に興味がある方を歓迎します。



赴任当時の東北師範大学(正門)にて

歴史学研究法概論

木 土 博 成

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース)

九州大学で働くことができる！このことが決まったとき、尊敬する九大の研究者の方々と一緒にできることが、心底うれしかったです。同時に、これでまたあのお好み焼き屋（写真）に通えると思うと、とても興奮しました。

大学に入ってから、京都、大阪、神戸で17年過ごしましたが、福岡に住んでいたとき、中学・高校時代に何千回と通った博多駅のバスターミナルビルは、思い出が深いです。7階のゲームセンターでエアホッケーをしていたら、浮いた円盤が勢い余って、ブリクラを撮っていた方に当たったり、また、円盤がエスカレーターに飛んで、下階の本屋にまでいったりしたこともありました。暇つぶしによくその本屋では、制限時間30分で、一番高い本を探し当てるゲームを友だちとしました。10万円近くしたカラー刷りの医学書が、たしか最高記録でした。

そんなビルの8階のお好み焼き屋は美味しいだけでなく、鉄板を焼いている過程がまる見えで、仕事場としても素敵です。カウンターに座れば、焼いている職人と面と向きあい、独特の時間が流れます。かつてそこには、年配の職人がいました。毎週通っていたときは気がつきませんでした。1年、あるいは数年に1度しか通えなかったとき、行くたびに職人の背中が丸まていくのを感じました。鉄板に向き合うという仕事柄ゆえでしょう。長く取り組んでいる人の仕事にふれたり仕事場を覗いたりすると、型、癖というか、しがらみというか、様々なものが仕事の成果物だけでなく、その体、仕草、場にも刻まれているのを感じます。

それは歴史研究者として、例外ではありません。私が研究しているのは日本の近世期、とくに、16～18世紀の大名島津氏（薩摩藩）の歴史、ないしは、江戸幕府－薩摩藩－琉球の三者関係史です。最近、すこしずつ自分の型というか、癖のようなものを感じようになりました。恥ずかしながら、列挙してみます。

①すこし離れて 関西の歴史資料（史料）に囲まれてきた分、研究では離れてみたくて、鹿児島や沖縄のものに惹かれました。「多くの人は年数の多いほどシングル・モルトはうまいと思いがちだ。でもそんなことはない。年月が得るものもあり、年月が失うものもある」（ラフロイドのイアン・ヘンダーソン氏、村上春樹『もし僕らのことばがウイスキーであったなら』）という名言があります。これをアレンジすると、分析対象に近づくことで見えてくることもあれば、近寄りすぎると見えにくくなってしまうこと、ある

いは、すこし離れればかえって見えてくることもある、といえるでしょうか。すこしの距離をもどかしく思うと同時に、大切にしながら、鹿児島や沖縄の研究を続けています。

②ワープに期待 ボンバーマンの京都のような碁盤目状の舞台には、ワープの仕掛けがあります。右に行ったつもりが、いつのまにか左端に飛ぶ不思議な回路です。歴史研究の世界では、しばしば知りたいことと、残された史料とには、おおきなずれがあり、歯がゆい思いをします。たとえば、知りたいのは、その公家が薩摩藩士と会って何を話したかであるのに、日記には天気のことと、二日酔いになったことしか書かれていなかったり、一方、思いもしない発見もあります。頼まれ仕事で、まったくノーマークだった史料を読んでいると、自分が知りたかった江戸時代の泡盛の流通を示す貴重な記事に出会ったり、なるべく多くの史料、それも自分では寄りつかないようなジャンルのものを、精々読んでいきたいです。左に行けば、いつのまにか右に行けると信じて。

③長い時間軸で しっかりとした問いさえ立てることができれば、答えはいつかこちら側で見つかるかもしれないですし、あちら側で見つかるかもしれません。あるいは、私の一生をかけても見つからないかもしれません。それでも、その試行錯誤の軌跡をきちんと示すことができたならば、次の世代の何らかの発見に寄与できるかもしれません。歴史研究を通して、何十年、何百年のスケールで物を考えることに慣れているせいか、世代を越えた知の伝達、学問の進展には楽観的です。その反面、数年で成果を求められると、少々戸惑うのですが、

いつの時代も、人間の織りなす社会はきっと単純で、なおかつ、きっと複雑怪奇なことでしょう。まるでボンバーマンの舞台のように、そこら中にワープの仕掛けがあり、あらぬ方向に導いてくれると信じ、対象からちょっとだけ距離をとり、今日も史料を読んでいます。博多駅のバスターミナルビルのお好み焼き屋で、古文書や絵図のコピーを眺めている者がいたら、たぶん私です。



それって何の役に立つの？

渡 部 哲 史

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース)

(比較社会文化研究院 環境変動部門)

現所属に赴任しておよそ2か月が経過しました。何かわかったというにはあまりにも短すぎるのですが、それでも私がこれまで所属してきた工学系とは大きく違いそうだというのはどうやら間違いないようです。

私は土木工学分野の水文学という水の循環を扱う学問分野で学位を取得し、気候変動下での洪水や渇水といった水関連災害に関する研究を行ってきました。また、日本では気候変動と同様に人口減少も大きな変化であることから、気候変動と人口減少が水循環や水の周りの環境に及ぼす影響についても分析を進めてきました。

これまで所属してきた土木系の研究室では、学生が卒業論文や修士論文の発表をする際の想定質問の一つとして「それって何の役にたつのか？」がありました。一口に土木系と言っても研究に対する考え方は人によって様々で、土木系に所属する全員が、大学での土木系の研究は今すぐ何の役に立つべきだと考えている訳ではありません。ただし、何かに役に立つという前提が無くなるとそもそも土木で研究する意味もなくなってしまうので、やっぱり多少なりとも何に役立ちそうかという考えは必要でしょう。

今回ご縁を頂き、自分が学び、働いてきた工学分野・土木分野から外に出ました。想像していたとおり、いや、それ以上に「何の役に立つのか」という質問から離れた世界に来たことを感じています。私がこの数年、特に興味を持って進めてきた研究対象の一つが農業用ため池です。従来は維持管理への貢献など、「何の役に立つのか」という点を出発点とした研究を行ってきましたが、

もっと自由な発想で不思議と思ったことを追求する姿勢の大事さを改めて感じております。

何の役に立つかわからないものが、その後に思いもしないところで大きく役立ったという例は枚挙にいとまがありません。そのような余裕がある状況では、余裕から次の余裕が生まれるという正のフィードバックが生まれそうです。一方で、そのような余裕のない状況では今役に立つことを優先せざるを得ず、それがまた将来の余裕も奪うことになるでしょう。

残念ながら、大学を巡る昨今の状況からは「何かの役に立つ」とことの重要さ（研究成果そのものが世の中の役に立つということよりも、「大学のランキング向上」の役に立つという方が的を射ているかもしれません）を陰に陽に感じます。そのような中でどのように研究や教育を進めて行くかという問は、このまま“逃げ切れない”世代にとっては避けて通れないものでしょう。「研究に対して役に立つかどうかを問うなどけしからん」というのは簡単です。そのようにできた時代は良かった。ただ、これからはきっとそうはいきません。かといって、このような時代を嘆き、悲劇のヒーロー／ヒロインとして滅びの美学を追求しても仕方ありません。

土木分野は役に立つ研究である一方で、悲しいかな、大学のランキング向上という観点では、国際的な成果を次々と発表する他分野に比べてどうしても劣る部分があります（注：あくまでも個人的な意見です）。地域に根差した「役に立つ」研究をしようとすればするほどその傾向は強くなります。個別事例だろうと発信していけば良いという意見も正しいのですが、その観点では工学系よりも人文社会学系の方が進んでいるのではないのでしょうか。

自然科学の観点から水に関する普遍的な事象を追求するよりも、農業用ため池に関する具体的な社会課題に興味を持ってきた私はずっとそのようなことをぼんやりと考えていました。そんな中、予想だにしなかったことに、社会であれ大学ランキングであれ「役に立つ」研究至上の世界を離れ、学問分野さらには学問観すらおそらく多様であるだろう世界にたどり着きました。従来続けてきた農業用ため池をはじめとする水の研究について進めることに加えて、このような大学を巡る昨今の状況での研究や教育のあり方についても考えていきたいです。



そうだ調査、行こう。

福田 千 鶴

(地球社会統合科学府・包括的東アジア・日本研究コース)
(基幹教育院)

2023年10月1日より学府担当となりました。

よろしくお願いいたします。

私の専門は、日本近世史です。簡単にいえば、江戸時代の歴史を調べています。九州大学に提出した博士論文のタイトルは、「幕藩制の確立と御家騒動」でした。これをベースに『幕藩制的秩序と御家騒動』という、私にとって最初の学術専門書を1999年に校倉書房から出版しました。

私が御家騒動の研究を始めたころは、よくそんなテーマが研究になるね、と冷ややかな目で見られることが多かったのですが、今では御家騒動研究は近世史研究のメインストリームになった観があります。というのも、日本全国に大名家が約200あるとすれば、それぞれの大名家で一度や二度は御家騒動が起きていますから、どの地域であろうとも分析する事例はころがっているわけです。要は、御家騒動をいかに分析するか、という分析視角が拙著によって提示されたことで、それを用いて各大名家の御家騒動を解明するための視座が得られるようになったことが大きいと自負しています。

と、そんな手前みそはともかく、大名史料を求めて全国を訪ね歩いた結果、ふと気づけば47都道府県全てを踏破することになりました。高校生の頃に全国を旅する仕事につきたいと思い、旅行会社への就職を考えたこともありましたが、まさかこのような方法で全国を旅することができるようになるとは思ってもやめませんでした。

2016年度から2020年度にかけては、文部科学省科学研究費基盤研究A「日本列島における鷹・鷹場と環境に関する総合的研究」が採択され、研究代表者として20人を超える研究者を組織して活動しました。それまで主に政治史研究を進めてきていたので、鷹狩というテーマはやや唐突の感があったようで、なぜ福田が鷹狩をテーマに研究しているのか、と尋ねられることも多かったのですが、実はこれも御家騒動研究なかで発想を得たものでした。

領主権の象徴である鷹、および鷹を使った狩猟をいかに権力のもとに掌握するか、ということをめぐり、主従争論に発展する事例が御家騒動の一類型としてあり、これを理解するためには鷹狩そのものの歴史分析を進める必要がありました。日本の鷹狩のルーツはモンゴルにあるとされており、ならばモンゴルに行

かねば、と思いついたことも第一の理由でしたが…。こうして、日本を飛び出し、モンゴルの大地に立った時の感動はいうまでもありません。

鷹狩の研究を始めた頃は、オオタカとハヤブサの区別もつかないド素人でしたが、真面目に取り組んだ5年

間で、日本の鷹狩の特徴は17世紀初頭到大鷹で鶴を獲る技術が大成させたことにあり、これは世界的にみても珍しい狩猟方法だということがわかってきました。また、鶴といえば丹頂鶴だと思うかもしれませんが、大鷹に丹頂鶴を獲らせるのは甚だ危険な行為であり、鶴は小型の黒鶴、よくて真鶴（まなづる）だということも理解できるようになりました。その成果は、福田千鶴・武井弘一編『鷹狩の日本史』（勉誠出版、2021年）として公刊していますので、ぜひご覧いただければ幸いです。

2021年度からは、文部科学省科学研究費基盤研究C「豊臣政権の人的資源再配分に関する基盤的研究」というテーマで、慶長11年（1606）に豊臣秀頼が出版した古活字版『帝鑑図説』の悉皆調査を進め、全国の『帝鑑図説』を求めて旅しています。これもまた前述の研究とはまったく無関係にみえますが、私のなかでは長年温め続けてきた研究です。九州大学で研究する時間は長くは残されていませんが、これをまとめることができれば、歴史研究は卒業かなと思っています。

振り返れば、行く先々で史料を調査し、残りの一生をかけても、読み切れないほどの史料を収集してきました。それでもまだまだ読んでみたい史料が日本全国にあります。また、行けばかならず新たな発見があるので、史料調査の魅力は尽きません。なので、早速、次はどこに調査にいこうかな、と思案しているところです。



留学生教育学会 第12回優秀論文賞

渡 部 裕 子

(地球社会統合科学府・言語メディアコミュニケーションコース修了)

この度2023年度留学生教育学会年次大会の席上で優秀論文賞をいただきました。これは2022年9月に学位をいただいた博士論文の一部になっている論文です。

留学生教育学会は、留学生に関わる全ての教育機関や市民が連携し、よりよい留学生環境を形成することを目的に設立されました。日本における労働人口の減少を背景に、留学生は将来的な日本社会での活躍が期待されており、日本語教育や人材育成教育、地域や企業における国際共修や多文化共生など幅広いテーマが見られます。

今回私が受賞した論文は、前述した通り博士論文の一部になっているため、本稿が通常別テーマである「博論を書いて」にやや近い内容になってしまうことをお許しいただければ幸いです。

博士論文のテーマは『留学生のキャリア形成と人材活用に関わる主観的キャリアの研究』というもので、キャリアを考える上での個人の価値観や興味・関心を表す「主観的キャリア」と、キャリア上の意思決定の関わりに焦点を当てています。私は長年留学生を中心とした日本語教育に従事しておりますが、途中キャリアコンサルタントとして様々な方への就職支援を経験しました。この経験が再度従事した日本語教育をキャリア支援の一環として捉えるきっかけになっています。

「主観的キャリア」に注目したのは、個々の価値観や興味・関心がキャリア形成に反映されると満足度が上がり、その人自身の良さが発揮されると考えられるためです。留学生や在留外国人に関わる研究では日本社会への不適応や就職に関わる課題などマイナス面に焦点が当てられることも多いため、自分が知る、日本社会でよりよい人生を送ろうと努力する個々の留学生や元留学生に光を当てて、その姿を知ってもらいたいという考えがありました。

ただ、博士論文は研究したいトピックこそ決めていましたが、テーマが明確だったわけではなく、欧米が中心の先行研究を広くながめるところから始まりました。当時フルタイムの教員で、家庭の事情でなんとしても3年で修了したかったため、タイムマネジメントは大きな課題であり、いかに効率よく抜かりなく執筆までの過程を進めるかを考え

る必要がありました。膨大な資料の整理には気晴らしで見るNetflixの整理術番組を参考にし、論文の組み立てには指導教官の松永先生がゼミで何度も指摘されることや、博士総合演習の先生方による様々な学生へのコメントを全てメモしてポイントを身に付けようとしてしました。このとき身に付けた目的と課題、研究方法と結論に至るまでの論理の一貫性という論文の基本は、今回の受賞理由にもなっており、まさにゼミでご指導いただいたおかげだったと感謝しております。

また、九大の博論の審査は学内だけでも指導教官以外に3名の先生にお願いする必要があり、必ずしも専門領域が同じとは限りません。専門領域内では共通認識であることにも異なる視点で様々なコメントやご指摘をいただいたことで、より論文の完成度が高まったと感じます。論文の修正中は時間も労力もかかり、期日に間に合うか不安になりましたが、ふと、これは社会でも同じであると感じました。つまり、専門や立場が異なる人と仕事をしたり、意見の相違があることは当たり前にあることで、相手の意見に耳を傾け、こちらの意図をあきらめずに理解してもらえよう努力をすることが大切だということを、改めて執筆を通して学びました。そのため、受賞論文の投稿時の査読コメントに対しても前向きに修正でき、あまり労せず完成に至った気がします。

今回の受賞を励みに、今後も日本社会で頑張る個々の留学生や外国人に光を当てるような研究を続けていきたいと考えております。



日本蜘蛛学会 学生発表賞を受賞して

相 知 紀 史

(地球社会統合科学府・包括的生物環境科学コース)

発表題目：「カグラゴマグモ (サラグモ科：カグラゴマグモ属) における雌雄対応関係の再検討」

2023年8月25～26日に熊本県で行われた日本蜘蛛学会第55回大会にて学生発表賞を受賞することができました。

私はクモ目サラグモ科を対象に分類学的な研究を進めています。サラグモ科は、クモ目の中でも種数の多いグループであり、分類学的な研究が進んでいないことが問題となっています。特に、他の分類群でみられるような世界の属を網羅的に扱える検索表はほとんど存在しないとされており、今後は既存の分類体系の整理が必要であると考えています。

このような状況の中で、私は修士課程でサラグモ科カグラゴマグモ属に焦点をあて研究を行いました。この属の研究に取り組んだ理由としては、大きく2つの理由があります。一つ目に、既存の分類体系に問題があったことです。カグラゴマグモ属はカグラゴマグモという一種から構成されているのですが、この種が新種として記載された際の雌雄対応に問題があるとされてきました。つまり、雄と雌が別種である可能性があるということです。二つ目に、単型の属であることから他の属との関係を深く調べたかったということです。サラグモ科ではカグラゴマグモ属のように一つの属が一つの種で構成される、単型の属が多く存在します。このような属は、これまで形態学的な情報をもとに既存の属には当てはまらなないと考えられ作られてきました。このような単型の属を形態情報に加えて分子情報も活用することで、他の属との関係を詳しく調べることで分類体系の整理に寄与することができるのではないかと考えたからです。このような理由から、研究ではタイプ標本を用いた記載時における雌雄の形態情報の比較、分子情報を用いた雌雄対応の検証・他の属のクモとの比較におけるカグラゴマグモ属の近縁属の解明をおこないました。その結果、記載時の雌雄は形態情報から単眼の配置が大きく異なっていること、分子情報から30塩基以上の違いがあることが分かりました。この結果から、原記載時の雌雄が対応していないということが明らかとなりました。また、形態・分子情報から支持される記載時の雄に対応する真のメスの存在も明らかとなりました。さらに、配列情報の比較からカグラゴマグモはサラグモ科のオオイサラグモ属と近縁であるということが強く支持され

ました。

学会大会では以上のような研究成果を発表し、学生発表賞を受賞することができました。受賞にあたって、学会大会を主催・運営していただいた皆様にご場をお借りして感謝申し上げます。また、日ごろより研究の指導をいただいている館卓司先生をはじめとする生物体系学教室の先生方や助言をいただける研究室の皆様、標本調査等でお世話になった博物館の先生方、標本をご提供いただいた先生方に深く感謝申し上げます。さらに、本研究を実施することのできる素晴らしい研究環境を整備していただいた地球社会統合科学府に深く感謝申し上げます。今後は本学府でさらに研究を深めるとともに、論文作成にも積極的に取り組んで参りたいと考えています。



日本文化政策学会 第2回学会奨励賞を受賞して

高 久 彩

(比較社会文化研究院特別研究者)

この度、日本文化政策学会の第2回学会奨励賞（論文の部）を受賞いたしました。本学会は、国や地域の歴史・文化を踏まえつつ、学際的なアプローチによって文化政策研究の学術的発展を目指すとともに、学会賞を通じて将来の文化政策学を担う研究者の著書、または論文を顕彰しています。今回、日本文化政策学会編『文化政策研究』第15号（2021年度）に掲載された拙稿「明治4年太政官布告の『古器旧物』分類の特質—博覧会と神祇行政の関係性に注目して—」が、受賞作として選ばれました。

拙稿は、地球社会統合科学府に提出した博士学位論文「明治太政官制下における博物館の制度化—「神代」および祭政一致思想との関係性に注目して—」（2022年9月博士（学術）取得）を構成する論文の一つで、その論文内容に加筆や修正を加えて、本学会の学術雑誌の投稿論文として掲載されたものです。この論文を執筆する過程では、博士課程の指導教員である高野信治先生、古谷嘉章先生、中野等先生、そして総合演習や領域横断をはじめとする諸演習の先生方より、貴重なご助言を頂戴いたしました。ご指導くださった先生方や関係者皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

これまで研究を進めてきた博士学位論文では、「博物館」（東京国立博物館の前身）の沿革に関して、明治初期の太政官制下における「博物館」制度の形成過程に注目しながら、明治国家が実現しようとした祭政一致と「博物館」の制度設計との相互関係を検討してきました。本研究の動機は、西洋近代では、ミュージアムの公共性は政教分離が行われ世俗化がなされて成り立つと言われてきましたが、日本の明治期の博物館制度では、「神代」から連綿と続く天皇の「歴史」が重要な地位を占め、その根底には太政官が主導した祭政一致の思想との関わりがみられたことに違和感を覚えたからです。この事実を照らすと、明治期の国家が祭政一致を行いつつ、博物館を制度化するということはどのような意味を持つのかという疑問が生じました。この疑問を解明するため、西欧近代の価値体系やそれと不可分の関係にある科学性や専門性との比較を念頭に、「博物館」をめぐる諸制度の構築過程を考察するとともに、太政官の祭政一致思想と明治天皇の即位儀礼との関係や「博物館」制度における「神代」の観念を分析し、「博物館」が必要とした「歴史」とその実践の特質を析出することを試みました。

拙稿は、上述の疑問を解明するため、本来あった場所から切り離して集積された「もの」の集合体とその分類を分析の対象としながら、これまでの先行研究で文化財保護法の端緒とされてきた明治4年（1871年）の太政官布告の分類の特質を明らかにすることを目指しました。具体的には、明治初期の物産会や博覧会に出品された物品の数量データや出品者の属性を分析し、「古器旧物」の収集や展示および神祇行政の大衆教化の実践やそれと密接に関わる思想との関係を考察しました。その結果、明治4年太政官布告の分類は、明治政府の祭政一致の理念、とりわけ神仏分離に基づいて構築され、それに依拠した「博物館」の収集によって、明治5年（1872年）に「博物館」が開催した博覧会では「古器旧物」を通じて神祇行政が天照大神をはじめ神武天皇から繋がる天皇への崇敬を観覧者へ示すことが試みられていたことを確認することができました。

学会奨励賞審査委員会の講評では、拙稿は「ともすれば芸術文化振興に偏って進められてきたこれまでの文化政策研究の視野を広げた」とポジティブな評価をいただくとともに、より挑戦的なパースペクティブからの新たな知見や学術的貢献が求められるなど、今後の課題に繋がる重要なご指摘をいただきました。ご指摘を踏まえ、拙稿が抱える課題を克服できるよう、より一層精進しながら研究を進めて参ります。最後に、本紙で受賞報告する機会を頂戴したことについて、関係者皆様に重ねて御礼申し上げます。（授賞式は、本年度3月に青山学院大学で開催される日本文化政策学会第17回年次大会で行われます。）



文化政策研究 第15号
Cultural Policy Research vol.15
日本文化政策学会【編】
2022年4月刊行

九州考古学会奨励賞 受賞報告

松尾 樹志郎

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース)

2022年11月、九州考古学会より第16回九州考古学会奨励賞をいただきました。

賞の対象となったのは、「弥生時代後半期における収穫具の変遷とその意義—北部九州を中心として—」という論文です。本論文は、令和2年度に地球社会統合科学府に提出した修士論文の一部を加筆・修正し、『九州考古学』第96号に発表したものです。

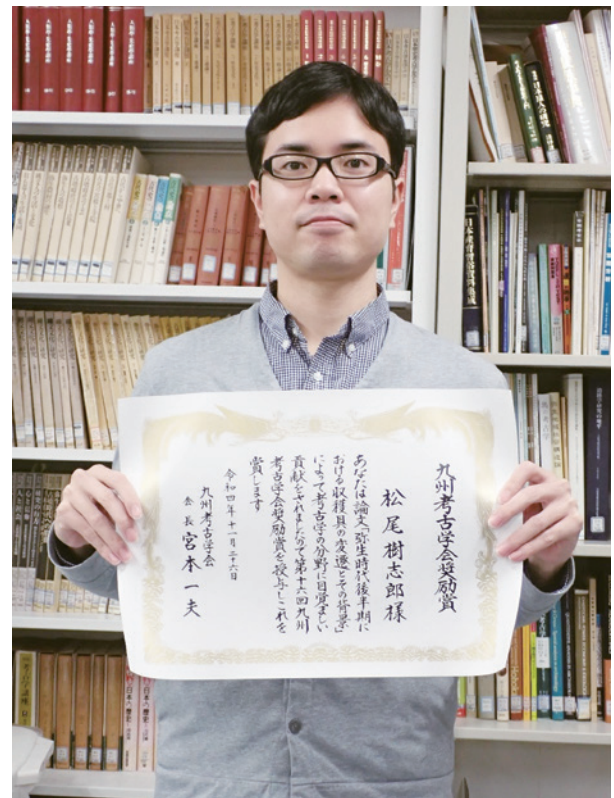
私が研究対象としている弥生時代は日本列島で水稻耕作が始まった時代として知られていますが、稲作を行うためには鋤や鍬などの土木耕作具や、臼や杵などの調整用具など様々な道具が必要です。こうした道具は時代とともに改良が重ねられ、変化していきます。本論文で研究対象とした収穫具もそうした道具のうちの一つで、弥生時代における収穫具の変化のうち特に注目されるのが鉄製収穫具の導入です。弥生時代の中期後半頃になると農工具や武器が石器から鉄器へと移り変わっていきますが、収穫具においては韓半島から鉄鎌が伝わり、そして日本列島独自の器種として「摘鎌」と呼ばれる鉄製穂摘具が使われるようになる一方で、既存の石器である石庖丁の使用も継続することがわかっていました。しかしながら、発掘調査による出土資料が増加の一途をたどる一方でその資料を悉皆的に集成し丹念に分析した研究は近年行われておらず、収穫具の変化の実態には必ずしも明らかでない点がありました。

こうした研究の現況をふまえ、私はこの論文で鉄製収穫具の導入過程と、収穫具の器種構成について、特に資料が豊富な韓半島と北部九州を対象として比較検討を行いました。その結果、北部九州では弥生時代中期後半以降、鉄鎌が出土する集落においても石庖丁や摘鎌など穂摘具が共存することを示し、鉄鎌の出現以降穂摘具が消滅する韓半島との間に差異があることを明らかにしました。また、このことは器種構成が変動する一方で収穫技術は依然として変化していなかったことを示すと考え、新たな器種の出現がすなわち新たな技術の導入を示しているわけではないことを指摘しました。本研究によって、韓半島から鉄器を受容することで既存の石器が衰退し器種が移り変わっていく、というそれまでの考えを再考し、新来器種の導入と既存の体制の維持・変容、さらにその背景にある農業技術という観点から考古資料の様相について捉えなおす必要性を提示できたと考

えています。

以上のような論文の骨子は元になった修士論文において既に完成していましたが、修士論文を執筆するにあたって既存の枠組みとは異なる角度から考察を行えたのは、考古学だけでなく隣接諸分野の先生方が教員として在籍されている地球社会統合科学府という環境に身を置くことができた、というのが大きかったように思います。様々な専門分野の先生方から授業内外で指導を受けるなかで得られた新しい見通しは少なくありませんでした。改めて感謝を申し上げたいと思います。

受賞にあたっては、現象を数量的な面から明示したことや、先行研究における枠組みの再考に挑んだ点を評価していただきました。論文の発表後にはいくつか反応もいただいていたのですが、改めてこういった形で評価していただけたことはたいへん嬉しく思います。また、今回受賞したのは奨励賞ということで、今後の更なる飛躍に期待を込めたものと理解しております。賞に恥じないよう、今後も研究に邁進し継続的に成果を発表していく所存です。

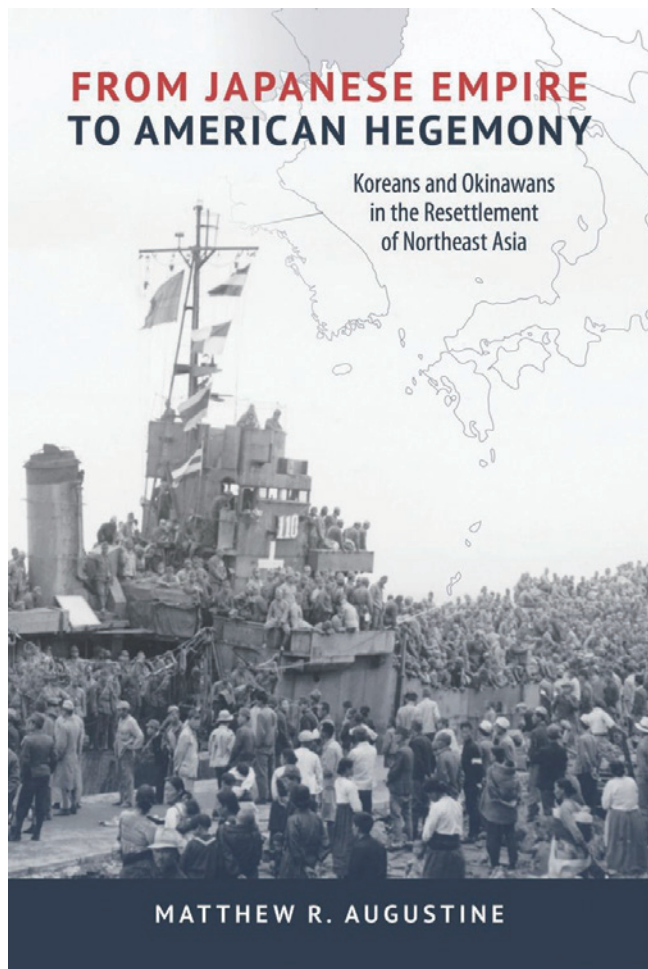


From Japanese Empire to American Hegemony: Koreans and Okinawans in the Resettlement of Northeast Asia

マシュー・オーガスティン

(地球社会統合科学府・包括的東アジア日本研究コース)

(比較文化研究院)



私がプリンストン大学政治学部を卒業し、外交官として就職することを目指すべきか、或いは学問の道を辿るべきか思索していた時、アメリカを代表する歴史学者ジョン・ダワーの著書『Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II』（1999年、和訳版2001年）に遭遇した。さすが合衆国における文学（歴史部門）の功績としてピューリッツァー賞を受賞しただけのことはあり、第二次大戦後に日本人が体験した敗北と占領の物語を描いた奥深い叙述に感銘を受け、進学した上で研究分野を歴史学に改めることを決心した。序章でダワーは、戦後日本占領期の歴史的意義について次のように説明している。「現代日本社会の中核にあるものの多く、たとえば民主主義の性格と

か、平和主義と軍備拡張についての大衆の感情的反応の強さとか、あの戦争の記憶（そして忘却）のされ方とかいったものは、実は征服者と被征服者との間の複雑な相互関係から生まれたものののである」（12頁）。日米両国で教育を受けてきたアメリカ人として、この主要な論点は、「全能の戦勝国アメリカ」という単純な従来の神話に疑問を投げかけるものであったため、興味をそそられた。また、戦勝国が占領下日本に導入した一連の改革はその時代と空間に独特なものであり、近隣アジアにおける占領地とは全く異なっていた、というダワーの論点も印象的だった。アメリカによって占領された南朝鮮や琉球列島は、対日占領と何がどう違ったのか、またその因果関係等について探究したいと思いついたことが、博士論文、そして著書を執筆する動機となった。

自著では、連合国が日本帝国を解体し始めた終戦直後の北東アジア地域を歴史の舞台としている。連合国により朝鮮半島を分断した38度線、後に「マッカーサー・ライン」として定められた朝鮮と日本の境界線、そして琉球列島と日本本土を分断した30度線は、それぞれ「国境」ではなく、軍事占領地域を分離する行政上の境界線であった。日本帝国圏の渡航管理制度を廃止するとともに、占領軍は解放された植民地出身者の帰還、さらに日本人の引揚げを含めた各「民族の大移動」にどう対処するか、解決策を見出さなければならなかった。人々の往来が混乱を極めるなか、表紙の写真は1945年10月18日に博多へ進駐したばかりのアメリカ占領軍が撮影したもので、何千人もの日本人復員兵が引揚船から下船し、代わりに乗船するのを待つ朝鮮人の姿を捉えている。結局、「内地」・「外地」間の集団引揚げのみを許可することにより、占領軍は日本をアジア太平洋地域における旧帝国圏から孤立させようと努めた。しかし、各民族の集団引揚げにより日本帝国を解体しようとするという解決策は、一度帰還してから様々な理由により再び日本本土へ向かった人々、朝鮮半島の政治的混乱を逃れるために流出した人々、闇市の越境的拡大に伴い北東アジア地域を駆け回った人々等、無数に出現した渡航者の前に立ちはだかった。このような循環移動は、日本帝国圏内では頻繁に見られる現象であったが、アメリカ軍占領地の境界設定がこれら旧帝国の「臣民」を突如、「不法移民」へと変貌させ

た。検挙された者は収容所に送られ、尋問を受けた後、強制送還された。集団引揚計画は終戦後4年程ではほぼ終了したが、占領軍が構築した強制送還体制は朝鮮戦争を経て現在に至るまで機能し続けた。

終戦から冷戦初期にかけて日本本土、南朝鮮、琉球列島における新たな境界線を超えて移動した人々の出現は、各地の占領当局および政府当局との間で、流動的かつ多面的な関係を生み出した。こうした関係性および相互作用が、どのようにして北東アジア地域における国境管理および出入国管理のあり方を再編することになったのかを理解するため、次の諸問題を取り上げた。1) 終戦時、内地在住の朝鮮人と沖縄県民にとって、「解放」と「敗北」はそれぞれ何を意味したのだろうか？また、その意味づけが日本本土に留まるか、あるいはそれぞれの出身地へ帰還するか、という自己の決断に果たしてどこまで影響を与えたのだろうか？2) 米軍占領下の南朝鮮と琉球列島における帰還者の再定住をめぐる困難な状況は、なぜ越境的な密航ネットワークの拡大に貢献することになったのだろうか？3) 密航者、不法移民、戦争難民等の人流は、いったいどのようにして排他的な渡航管理体制の構築につながったのだろうか？これら諸問題に対して、帰還、再定住、不法入国といった人々の移動に焦点を当てることで、第二次大戦後の北東アジア地域におけるアメリカ占領地とその住民の身分が再形成される過程を解明してみた。

本書の題名が示す通り、日本帝国からアメリカ覇権の時代へ移行した歴史的過程を理解するため、軍事占領を基盤とした戦後アメリカ式覇権の確定を主たる研究テーマとした。アメリカの国際政治学者ロバート・コヘインとジョセフ・ナイは、ヘゲモニーについて「ある国家が極めて強力であるため国家間関係を左右する重要な役割を維持し」、国際秩序の「新しいルールを作る上で中心的な役割を果たす」(58-59頁)と解説している(1977、和訳版2012年)。これは、第二次大戦後の北東アジア地域において、米政府高官が占領者としての権限を用いて、占領地の対外関係に関わるルールをどのように策定したのかを論じるのに有用な説である。占領当局間で交わされた覚書、報告書、電報等を分析した結果、在朝鮮米軍司令部軍政庁(USAMGIK)と琉球列島米軍政府(USMGR)が連合国軍最高司令官総司令部(GHQ/SCAP)と同様、政策決定機関であったことを解明した。それぞれ大使館の連絡事務所に相当する部局が設立されており、近隣の占領当局が相互に対話するという水平的な関係構造を反映していた。こうした越境的な視点に立つと、アメリカ覇権への道を切り開くことに貢献した占領地間関係を探究する、という新たな研究領域の枠組みが見えてくる。したがって本書の主要な論点の一つは、アメリカ占領当局間の協調をめぐる程度が、日本帝国を解体するための便宜的な手段として引揚計

画と強制送還を併用することで、各占領地の境界をどこまで効率的に管理できるかを決定づけた、ということである。

占領地における境界管理に関する研究を通してアメリカ覇権主義の範囲の探究にあたり、人々の移動に対する絶対的な統制は不可能であることを改めて実感した。占領軍が武力のみで領土支配するには限界がある、という事実を歴史が証明している以上、占領支配を徹底するためには協力者に依存する必要がある、と認めざるを得ない。カナダの歴史学者ティモシー・ブルック(2005)が論じているように、「軍事占領はコラボレーション(協力)を生み出す」(9頁)。ポスト帝国時代の日本、韓国、琉球列島における新たな移民法の制定には、占領者と被占領者の緊密なコラボレーションが不可欠であった。また、「臣民」から「国民」への変貌を具現した国籍法の改正も同様であった。このコラボレーションをめぐる動機、過程、およびその結果について分析することにより、関係当局が「外国人」という新たな法的身分をどのようにとらえ、彼らを「日本人」から排除するための対策をどのように交渉したのか、理解することができる。そのため、本書では冷戦の激化に伴うコラボレーションの深化が、各占領地において厳格な出入域管理体制を共同で構造するに至り、その結果、韓国人と北朝鮮人、日本人と「琉球人」をどう区別するのか、という新たな問題を生み出すことになったと論じた。

和訳版を刊行できるかが今後の課題であるが、上記の事柄に少しでもご関心があれば是非ともご講読ください。

【文献】

ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて—第二次大戦後の日本人』(岩波書店、2001年)

ロバート・コヘイン、ジョセフ・ナイ『パワーと相互依存』(ミネルヴァ書房、2012年)

Timothy Brook, Collaboration: *Japanese Agents and Local Elites in Wartime China* (Harvard University Press, 2005)

【書誌情報】

Matthew R. Augustine (2023) 『From Japanese Empire to American Hegemony: Koreans and Okinawans in the Resettlement of Northeast Asia』 University of Hawaii Press [ISBN: 978-0824892098]

＜(社会) 考古学＞を生きること：『社会考古学講義：コミュニケーションを最小基本単位とする考古学の再編』（同成社2022年12月）について

溝 口 孝 司

（地球社会統合科学府）

私は私のおこなっている考古学を「社会考古学」と呼んできました。そしてその理由について様々な場で様々に語ったり書いたりしてきました。私はこの世界に現れる可能性のある「考古学たち (archaeologies)」すべては「社会考古学」であらざるを得ないと考えています。考古学的研究の対象としての人間の思考と行動の「痕跡」がなぜそのようなになったのか？そこに見出される「パターン」はなぜ産み出され、維持され、変化したのか？私たちは、なぜそれらに私たちがやっているようなやり方で意味づけをし、説明し、理解するのか？そうすることは、私たちが生きてゆくことに対してどのような意味を持つのか？

社会的存在としてそのような疑問に答えるために、全ての考古学が「社会考古学」であるとすればあえてそのように呼ぶ必要もない「考古学」を、私はことさらに「社会考古学」と呼ぶことをしてきたわけです。社会性は二人以上の人がある一定の相互協調をしつつ交渉すること、コミュニケーションすることにより現出します。だとすれば、社会が存在するということは、様々なコミュニケーションが継続するとともに、そのような継続を可能にする様々な条件がそこに存在し続けていることに他なりません。そのような社会を取り巻く環境が変化すれば、そのような条件も変化する。社会の中で (のみ) 継続するコミュニケーションの継続も難しくなることがあるでしょう。それでもコミュニケーションは続かなければなりません。なぜなら私たちは、「社会的な動物」だからです。なぜコミュニケーションは継続するのか？何がそれを可能とするのか？そして、その継続を可能にした条件とはなにか？また、そもそもコミュニケーションの継続の痕跡を考古資料にどのように確認することができるのか？これらの、私の社会考古学にとって根本的な問いについて、さまざまな資料からアプローチし、考え、さまざまな側面からさまざまな方々とさまざまな場面で意見を交換し、議論してきました。それが私の社会考古学、すなわちコミュニケーションを分析最小基本単位とする考古学の実践であり、その実践そのものも、コミュニケーションであったわけです。

この書物は私の単著としては四冊目、クレア・スミス教授と共

著した書物を加えると五冊目の書物となります。日本語の書物としては初めてのものとなります。

これまでの四冊の書物はそれぞれ明確なテーマの解明のために書かれました。

Mizoguchi 2002は、社会的存在としての人間が、それが共存せざるを得ない人間と自然という不確定性とリスクの源泉を、＜他者 (=the Other)＞としてのどのように分節化し、それとの関係において自らをどのようにアイデンティファイしつつ社会生活を営んでゆくのか、その長期にわたるモードの変化の解明を試みるものでした。そこでは、日本列島における旧石器時代から古墳時代への長期にわたるプロセスを取り上げました。

Mizoguchi 2006は、過去における社会的存在としての人間を、現在における社会的存在としての考古学者が分析・記述するとき、そこに必然的に創発する (コミュニケーションの) 構造＝析出／動員される様々な＜資源＞とその析出／動員の＜諸規則＞が、同時代社会の構造とどのように同調・相互構築しているかの解明を試みるものでした。そこでは、学問的専門分野としての考古学の成立過程が、＜近代 (Modernity)＞の成立、＜領域国民国家 (territorial nation states)＞の成立との関連において「機能的必然」であったこと、また、＜近代＞の成熟とともに、考古学も変化せざるを得ず、＜近代＞の危機は考古学の危機と一体的なものであることを明らかにしました。

Mizoguchi 2013は、全体社会を構成する様々なコミュニケーション・システムが相互に相互の環境としてどのように相互規定・構築しつつ、全体社会の大きな変動を導いてゆくのかについて、大きな変動のフェーズごと、コミュニケーション・システムごとに、それぞれの構造と変動機序の具体的な復元からアプローチしました。そこでは、日本列島における本格的稲作農耕社会の始まりから飛鳥時代という、いわゆる国家形成過程を取り上げました。

Mizoguchi & Smith 2019は、考古学という営みが＜社会的行為 (social practice)＞であるという事実そのものが、「考古学する」ことが同時代社会の中における行為の選択の連続である

ことを必然化する、という認識を前提として、その選択がいかなるものであるべきかについて考察しました。そこでは、そのような選択が自覚的に方法化・理論化される実践例として現代社会におけるモニュメント、古墳時代研究と近代、先住民考古学、同時代社会の考古学、＜（同時代的諸課題への）参加（engaged）考古学＞の諸事例を取り上げました。

以上のように、これまでの筆者の四つの著作は

- 超長期歴史叙述 (2002)、
- 考古学の自己記述としての考古学史 (2006)、
- 国家形成という社会変動の解明 (2013)、
- 同時代社会において考古学するという選択のあるべき姿の考察 (2019)

を社会考古学的に実践しました。本書は、このような個々の実践の基盤としての枠組みを体系的に表出する行為＝講義を書物化したものです。

1983年、学部二年生として考古学を専門的に学び始めて以来、私は自らの考古学がどのようなものであるべきかを意識的に明確化すること、それはなぜかを説明することを常に志向し、試みてきました。そのような自らの歩みの中で、そのような考古学をするのはなぜか、が定位されなければ、どのように考古学するべきかを決定・選択することはできない、ということが強く意識されるようになりました。

科学は検証／反証可能な命題により構成され、世界についての事実を蓄積・更新しますが、どのような事実をどのような検証／反証可能な命題として選択・構成し、どのように検証するかは、究極的には個々人に委ねられています。個々人の生存がなければ科学はそもそも存在しませんし、個々人が社会的存在であるならば、社会の存続がなければ科学は成立しません。そのような意味で、社会の存続の条件、また、社会の（常に）「より良い」存続の条件について考察を深め、個々にそれを定位することが

- なぜそのような科学（としての考古学）をそのようにするのか

を説明するための前提となります。

本書のごとく、社会の存続が相互交渉・コミュニケーションの存続である、と定位するとき、その存続の条件とメカニズムとは何かを明らかにすることが、相互交渉・コミュニケーションの継続としての社会の「より良い」存続に貢献します。相互交渉・コミュニケーションの存続の条件とメカニズムについて、その多様性と可能性を明らかにすることは、社会の「より良い」存続への個々人の貢献の選択肢を増やし、結果として社会の「より良い」存続の可能性を高めます。

考古学は、＜人類過去＞の全領域を対象とする学問として、相互交渉・コミュニケーションの存続の条件とメカニズムについ

て、その多様性と可能性の認識の拡張に貢献することができます。ある条件のもとで存続し得た相互交渉・コミュニケーション、安定存続した相互交渉・コミュニケーション、変容して存続した相互交渉・コミュニケーション、存続せず社会として消滅した事例、これらの解明・記述を蓄積し、それらに関する認識を深化・更新することが、社会の「より良い」存続の可能性を高めることへの考古学の主要な貢献の一つとなります。

このような貢献を可能とする枠組みについて、筆者が考え、講義という形でこれまで表出してきたことをまとめたのが本書です。そのような意味で、本書は

- 社会の「より良い」存続の可能性を高める「より良い」考古学についての筆者の考えの体系的表出

ということになります。そのような意味で、本書は筆者が考古学を専門的に学び始めてからこれまで考えてきたことの中間報告でもあります。

体系的な自己言及・自己批判は、体系的な自己表出による自己の思考・行動の外化（＜externalisation＞）により初めて可能となります。そのような意味で、本書は／も、筆者自身にとって、体系的な自己言及・自己批判を可能としてくれるものです。本書への読者の皆様の批判と、自らの批判を糧として、さらに考古学すること、それを「より良いもの」とすることを続けてゆきたいと思います。それは、コロナ禍が続き、平和的主権国家ウクライナ共和国へのロシア連邦共和国による侵略が進行し、全地球的变化（＜Global change＞）の負の帰結が次々と現前する今、自らが考古学することの意味を問いつつ生きることでもあるのです。

（同書まえがき・あとがきより再構成）

文献

- Mizoguchi, K. (2002). *An Archaeological History of Japan, 30,000 B.C. to A.D. 700*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Mizoguchi, K. (2006). *Archaeology, Society and Identity in Modern Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mizoguchi, K. (2013). *The Archaeology of Japan: From the Earliest Rice Farming Villages to the Rise of the State*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mizoguchi, K. & Smith, C. (2019). *Global Social Archaeologies: Making a Difference in a World of Strangers*. London & New York: Routledge.

『近世日琉関係の形成—附庸と異国のはざまで—』 (名古屋大学出版会、2023年)

木 土 博 成
(包括的東アジア・日本研究コース)

1609年(慶長14年)に島津氏の軍事侵攻に屈した琉球は、これ以降、薩摩藩島津氏の影響下に入った。このたび公刊した『近世日琉関係の形成』では、16世紀～19世紀を対象に、近世の日琉関係がどのように形成され、そこにいかなる特徴があるかを論じた。日琉関係というからには、扱ったのは二者関係である。その一方で強く意識したのは、江戸幕府(将軍)―薩摩藩(島津氏)―琉球(尚氏)の三者関係である。

ここからいつもの授業の調子で、話は脇道にそれる。ひとくちに酒席といってもいろいろで、学会やイベントの打ち上げで何十人も集まっての立食パーティーもあれば、五～六人で、表には出しにくい話で盛り上がる密談の形式もある。正直な話、わたしは大勢の飲み会があまり得意ではない質で、好むのは少人数、たとえば二人で飲んだり、三人で飲んだりする席である。

一対一のサシ飲み(二人飲み)は、若い人ならまずはデートが思い浮かぶであろうか。デートでなくても、なにか相手に特別な願いがあるときには、一対一で申し込むのが礼儀だろうし、大勢で飲んだ帰りに、家が近くの人ともう一杯といって、二人で居酒屋に入るケースもよくある。こうした二者間で結ばれる関係性、たとえば会計の際にどちらが多く支払うかといった社会関係を、シンプルに二者関係と呼んでみよう。それは、目の前の相手に配慮し、向き合わなければいけない厳しい関係性である。一方が他方をさしおき、テーブルで新聞やスマホにうつつを抜かし、あるいは驕ってもらったのに礼も言わずに出て行くのは、マナー違反である(家族は例外か)。

では三人で飲むときはどうか。三者の社会関係は、二者の関係よりもいくぶん緩い。話者一人に対し、聞き手は二人いるので、すこし気楽に人の話を聞くことができ(聞き流せ)、酒のメニューを凝視することもしやすい。友人同士のフラットな三者関係ならなお気楽であるが、最近は上下関係を伴う席が多くなってきた気がする。だれが上位かは、猿なら目を合わせれば判明するが、人間の場合は少々複雑で、年齢の上下、役付の有無や職階、先例、ゲストかホストか、個人間の貸し借りの有無、といったいろいろな要素で決まる。

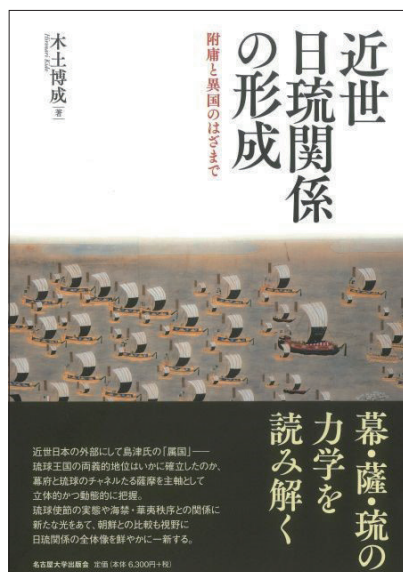
上位・中位・下位のうち、立場はどれが強いのかといえば、より上の方が強いに決まっている。この本で描きたかったのは、そうし

た上意下達式の構造ではなく、中位という間の存在がいることによって生じる複雑さである。

下位にしてみれば、普段は上にのしかかっている中位に頭が上がらない。それでも、中位のさらに上の上位を意識することで、中位の高がしれ、なんだか開放感が味わえる。

一方の中位は中位で、自らの権勢だけで、下位に強制力を発揮しえない恐れがある際には、上位の存在を持ち出し、下位への恫喝に迫力をもたせる。ただし、こうした上位の存在は、下位によって自らの存在を相対視されることにつながりかねず、中位にとっては諸刃の剣である。そのため中位は、下位が上位と直接結びつくことを避けようとする傾向があるが、こうした結びつきがときとして中位にとって、有利に働くとの判断がなされた場合、中位自らの仲介のもと、上位と下位にあえて接点をもたせようとする。

上位を江戸幕府、中位を薩摩藩、下位を琉球と読み替えていただければ、おおむねこの本で言いたかった構図のできあがりである。この本では、幕府や藩、琉球王府という組織を対象にしたが、人間が三人集い、そこに上下関係があれば、どこでも生じうる構図ではなかろうか。あるいは、昆虫の世界にも同じ構図があるのだろうか。いろいろな専門の方に、酒席でご意見を伺ってみたいものである。できたら、横並びのカウンター席で。



『フレーム意味論とフレームネット』の刊行に寄せて

内 田 諭

(言語・メディア・コミュニケーションコース)

(言語文化研究院)



メールを遡ると、この本に関する「決起集会」を行ったのは、2016年9月7日（水曜日）19時、東京大学駒場キャンパスの「ルヴェ・ソン・ヴェール」にてであった。企画書の日付は、さらに遡ること1年半、2015年の1月となっている。2023年5月に本書が発売されたので、8年掛かりの超大作、ということになる。幼稚園児だった長男が中学生になり、夏季オリンピックが2度（リオ、東京）開催されるという長期間を費やす書籍は、私にとって初めて最後であろう（おそらく…）。

これだけ長期間になったのには理由がある。記述の対象となった理論に関する論文や文献を体系的にまとめたものは存在せず、入手困難なものも多くあった。さらに、理論の提唱者であるフィルモア氏（Charles J. Fillmore）が2014年に逝去し、記述の正否についての問い合わせができなかったため、著者間での確認（あるいはフィルモア氏に関連の深い研究者とのやり取り）や精緻化に多くの時間を要した。また、本書が対象とするフレーム意味論は、その対象範囲が広大で、概念や先行研究を整理

し、体系化するには予想以上の時間を費やす結果となった。もちろん（?）、著者らが忙しかったから（筆が遅かったから）、ということも大きな要因ではあることは否めないが…。

* * * * *

言語学の究極の目標の一つは、言語を支配するルール、つまり文法を記述することである（ただし、昨今の生成AIの成功により、この想定も根本的に見直す必要があると個人的には考えているが、そのことについては稿を改めねばなるまい）。この方針に立つと、肉の部分を削ぎ落とし、通言語的に適用可能な骨の部分を体系化する、ということが目標となる。一方で、削ぎ落とした肉の部分にも旨味があり、言語の豊かさや個性が潜んでいる。ざっくりと言うと、言語学にはこの「骨」の研究を進める分野と、「肉」の研究を進める分野があり、その両翼を結ぶものが、本書で概説したフレーム意味論ということになる。あるいは、「骨」の研究から、「肉」の研究を産んだのがフレーム意味論である、とも言えるだろう。

一つ具体例を考えてみたい。「書く」という単語を例に取ろう。この単語が持つ骨格（構造）は「XがYを書く」のように表すことができる。別の言い方をすると、Xが主語、Yが目的語のようにも言え、これは「YをXを書く」のように順番を入れ替えても成り立つ。また、Xは「動作主（人）」、Yは「対象物（もの）」であることが一般的である。さらに、XとYには「名詞句」（形容詞＋名詞、関係節＋名詞など）が入る。このように、言語要素の「機能」（主語、目的語など）、統語の順序、意味の範疇、句の構造などを規則としてある程度一般化できる。

一方、「書く」という語そのものにも、より詳細な情報が含まれている。Xに入る「人」はさらに詳細な「執筆者」という役割を与えることができ、Yに入る「もの」は「文字で表現されるもの」（文章、記事、レポート、本など）であると細分化できる。さらに、書くためには鉛筆やボールペンなどの「道具」が必要である（昨今ではパソコンやスマホなどもその道具になり得るという事実も興味深い）。また、（本稿もそうであるが）「書く」という行為には「締切」が設定される。これもこの事象の一部であると考えることができる。

このように考えると、単語の意味を真に理解するためには、そ

〇 〇 〇 自著を語る

の構造や意味範疇などの一般的な知識に加えて、それに付随する周辺の知識（関連して登場する要素や背景となる常識等）が必要であることが理解できる。これが「フレーム」と呼ばれるもので、より具体的なレベルでの言語的な要素に関する知識を指す「言語フレーム」と、常識や手続き的な知識を含む「認知フレーム」に大別される。このどちらもフレーム意味論の射程ではあるが、本書は主に前者の「言語フレーム」に関する概念や研究をまとめたものである。

* * * * *

私の研究の出発点は「辞書」にある。辞書を「読む」ことが好きだったのだが、辞書によって定義や訳語が異なるという事実が不思議で、なぜ同じ英語と日本語という組み合わせなのに、それがきれいに対応しないのかということが疑問だった。また、英→日、日→英と翻訳の方向を変えるだけで全く景色が違って見えるということも、なんとも言えない魅力があると感じたものであった。

「辞書」の勉強がしなかったので、学部はそのメッカであった東京外国語大学を選んだ。ここでは実践的に辞書に携わる多くの先生から薫陶を受けることができ、充実した学生生活を送ることができた（と書くと、勉強ばかりをしていたように響くが、実際は…）。一方、辞書の記述に通底する（言語）理論的なものがない、と当時の私は感じていた。東京大学の大学院に進学し、そこで共著者（であり大学院時代の指導教員である）の藤井聖子先生から「フレーム意味論」の存在を知る。これは辞書と相性が良さそうだな、というのが率直な第一印象であった。そこから修士論文、博士論文とフレーム意味論を使った研究を行ってきた（接続語を対象としてフレーム意味論の枠組みで記述する、というもの）。それがこのような形で（時間はかかったが）書籍に結びついたのである。非常に感慨深い。

フレーム意味論と辞書という文脈では、タイトルの後半にある「フレームネット」が重要である。フレームネットはフィルモア氏の後期の代表的な仕事の一つで、オンライン上で構築が進められている「フレームの辞書」である。フレームネットでは、どの単語がどのようなフレームを喚起するのか、それぞれのフレームに付随する要素（フレーム要素）がどのように言語的に実現されるのか（例：buyerという要素は主語やby前置詞句等で表される）、フレーム同士がどのような関係にあるのか（図1参照）、といった情報を得ることができる。言語学の分野だけではなく、自然言語処理など工学系の分野からも注目を集めており、多言語でも展開されている。無料でアクセスでき（<https://framenet.icsi.berkeley.edu/>）、関連研究や用語集なども確認することができる。

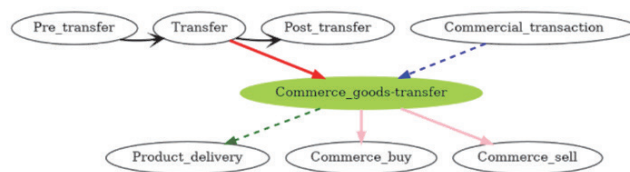


図1: フレームネットによるフレーム間関係の可視化

本書は3部構成からなる。Part 1の理論編ではフレーム意味論およびフレームネットの概要と、さらに構文理論（construction grammar）の概説を提示している。Part 2の研究編では、個別の言語事象を取り上げ、項構造構文や引用構文、接続語などの分析の事例を紹介する。Part 3の応用編では、フレーム意味論・フレームネットを、辞書や語学教育、自然言語処理に応用した事例を紹介している。

* * * * *

「フレーム意味論とフレームネット」。このタイトルを冠して出版するには責任を伴う。正直なところ、「これで大丈夫かな…」というところは多々あるが、研究書である以上、関西人の伝家の宝刀、「知らんけど」というわけにはいかない。大げさかもしれないが、日本でこの分野を牽引するという覚悟がないと、このような大きなタイトルをつけることはできない。それが果たされているかどうかは分からないが、我々は魂を込めて書いたつもりである。ご関心があれば是非手にとって頂ければ幸いである。

【書誌情報】

藤井聖子・内田諭（2023）『フレーム意味論とフレームネット』研究社 [ISBN: 978-4327401788]

比文歴史資料情報講座研究集会

伊 藤 幸 司

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース)

(比較社会文化研究院 社会情報部門)

2014年に比較社会文化学府を改組して誕生した地球社会統合科学府も、本年度で10年目を迎えた。比較社会文化研究院社会情報部門歴史資料情報講座所属教員が担当する地球社会統合科学府の包括的東アジア・日本研究コースBからも多くの修了生を送り出し、大学や博物館などに常勤職を得て活躍する研究者も輩出することができた。

しかし、この間、歴史資料情報講座の教員の半分が入れ替わり、加えて最近の約3年間に及ぶコロナ禍もあって、現・旧の教員間や、修了生・現役生とのつながりの希薄化は否めない。比文研究科が創設された折、「たこつぼ」になることを嫌って「講座」というものに重きを置かなかった。これが自由闊達な議論という環境を用意し、多くの有為な人材を輩出した一方、時間の経過とともに拠り所を持たないことのデメリットがメリットを大きく上回ってしまったように危惧されるようになった。

こうした状況に鑑み、同じ比文という場で「歴史学」に関わった者、または関わっている者として、時代や世代を超えた関係者相互の交流の場や、ネットワーク構築の機会の必要性を考えるようになった。具体的には、比較社会文化研究科の系譜を引く歴史学の関係者に呼びかけ、同窓会的な研究集会を開催することで、関係者同士との情報共有や懇談会を開催することとした。

研究集会は、以下の内容で行った。

- 内容：13:30 挨拶 (中野 等)
- 13:35 木土博成准教授紹介 (伊藤 幸司)
- 13:40 研究報告：木土「泡盛の初出をめぐる」
- 14:40 2022年度博士 (学術) 学位取得者の研究紹介
顧明源 (比文特別研究者)・高久彩 (同)
- 15:10 休憩
- 15:30 意見交換会
韓 淑婷 (関西大学文学部准教授)
石畑 匡基 (大手前大学国際日本学部専任講師)
内山 一幸 (大阪経済大学経済学部准教授)
穴井 綾香 (久留米市教育委員会)
- ほか、参加者の方々も交えて
- 17:30 高評 (有馬学名誉教授)
- 17:40 終了
- 18:00 懇親会 (小林亮介)

研究集会では、まず、2023年4月から本講座に着任した木土博成准教授に、お披露目も兼ねて、研究報告をお願いした。木土報告は、「泡盛」を題材とする興味深い内容で、質疑応答も硬軟おり混ざったものとなった。次に、2022年度に博士 (学術) を取得した顧明源さんと高久彩さんから、博士論文の概要と今後の研究の展望について報告頂いた。

その後、休憩を挟み、比文学府や地球社会統合科学府の修了後、歴史系の専門職に従事している4名の同窓生を迎えて、情報交換会を行った。4名は、大名華族研究の第一人者となっている内山一幸さん、教育委員会で文化財を担当している穴井綾香さん、芸芸から大学教員となった石畑匡基さん、留学生として来日し、日本で大学教員となった韓淑婷さんである。情報交換会は、司会から4名の皆さんへの質問を軸に、会場にいる修了生、教員、大学院生からの質問等も交えて進められた。4名の皆さんには、自己紹介の後、博士論文をどのような手順で執筆したのか、専門職に就くためにどのような戦略をもっていたのか、大学院生の時に何をしておけば良かったのか、各々の専門職での歴史学への向き合い方はどうかなど、みずからの経験にもとづいて回答を頂いた。こうした意見交換を通じて、現役の大学院生に対して、みずからの未来予想図を考える上で、具体的で多様なキャリアパスを示すことができたことは、一定程度の刺激になったと推断する。

比文歴史資料情報講座としては、今後もこうした研究集会を定期的に開催することで、有意義な情報交換の場を提供していきたいと考えている。



(左から、石畑さん、韓さん、内山さん、穴井さん)

文学系総合演習から巣立った卒業生との交流会

東 英 寿

(言語・メディア・コミュニケーションコース)

(比較社会文化研究院)

地球社会統合科学府の文学系は日本文学系と中国文学系で構成されており、毎学期水曜3限にそれぞれ分かれて総合演習を行っています。日本文学系は松本、波瀾、松枝、倉方の4名、中国文学系は東、秋吉の2名が授業を担当しています。今回は日本文学系と中国文学系が合同で、地球社会統合科学府設立10周年企画として「文学系総合演習から巣立った卒業生との交流会」を開催しました。

下記の交流会スケジュールのように、日本文学系と中国文学系から卒業生3名を招いて、2023年10月14日(土)14時から17時まで博多駅にあるJR博多シティ会議室において、文学系卒業生との交流会を開催しました。

(交流会スケジュール)

<地球社会統合科学府設立10周年記念> 文学系総合演習から巣立った卒業生との交流会 2023年10月14日(土) 14:00~17:00 JR博多シティ会議室(中会議室(2))		
<交流会スケジュール>		
14:00~14:05	開会(東)	
14:05~14:35	卒業生の講演1(尚絅大学・福永美佳氏)	司会: 東
14:35~15:05	卒業生の講演2(九州共立大学・大場健司氏)	司会: 波瀾
15:05~15:20	休憩	
15:20~15:50	卒業生の講演3(東義大学校・イムサンミン氏)	司会: 松本
15:50~16:00	休憩	
16:00~16:40	波瀾先生のアメリカ滞在報告	
16:40~17:00	閉会(松本)、記念撮影	
17:30~19:30 懇親会 (さかな市場 博多筑紫口店: JR博多駅筑紫口徒歩2分、https://www.hotpepper.jp/str/J000554527/)		

卒業生の講演のトップバッターは、福永美佳さん。福永さんは、中国文学系を卒業して現在は熊本にある尚絅大学の准教授です。彼女は九大の大学院時代に北京師範大学に一年間留学し、単位取得退学後は九大で中国語の非常勤講師を務めた後、吉林大學に日本語教師として赴任し、中国で生活しながら博士

論文を執筆しました。吉林ではマイナス28度の世界を経験したそうです。中国で執筆していた博士論文を帰国後に提出し学位を取得して、尚絅大学に就職します。博士後期課程在籍中に『日本中国学会報』へ投稿した論文が査読に通らず、苦しい思いをしたことも語ってくれました。その苦しい時代でも「悪い流れの時は待つ」、「頑張っていれば声をかけてくれる人がある」ということを支えにして乗り切ったということで、在校生にとって大いに勇気づけられる話でした。



(講演をする福永さん)

2人目の卒業生は大場健司さん。大場さんは現在九州共立大学の専任講師をしています。日本文学系の卒業生で安部公房を研究テーマとしており、フェイスブックに交流会のことをアップして、以下のように記載しています。

私は「九州大学と私—韓国・台湾・日本での研究・教育生活について—」という講演を行わせて頂きました。

内容としては、①九州大学での思い出、②韓国・台湾の大学での研究・教育生活、③日本の大学での現況、などについてお話ししました。また、拙著『1960s 失踪するアメリカ—安部公房とポール・オースターの比較文学的批評』(春風社、2022年12月)の出版の経緯などについても触れました。

久しぶりに九大の先生方、大学院生の皆さんとお会いできて良かったです。今回、お招き頂いた先生方にはとても感謝しています。(以上、FBより)



(講演をする大場さん)

大場さんは博士後期課程在籍中に結婚をして、単位取得退学後、韓国の朝鮮大学校で教員生活をスタートします。2年間、韓国で日本語を教えた後に、台湾の国立国防大学に移り日本語を教えています。海外で就職を希望する在校生にとっては、大場さんの経験は大いに参考となったと思います。この韓国、台湾滞在中に博士論文を作成して学位を取得し、現在の大学へ就職されました。私は台湾の政治大学へ講演に行った際に、当時台湾にいた彼と奥さんと一緒に食事をする機会があり、台湾生活について色々聞くことができたことを懐かしく思い出しました。その時、日本の大学に移りたいと言っていたので、学位取得後に九州共立大学に就職できて本当に良かったです。

卒業生の最後に登壇したのは、韓国の東義大学校准教授の林相珉（イム・サンミン）さんです。この交流会のために、わざわざ韓国の釜山から駆けつけてくれました。現在、東義大学校で日本語と日本文学を教えています。日本文学系の卒業生で講演のタイトルは「分節化されるワタシ」。韓国で2年間の兵役を終えた後、比文に研究生として来日し、半年後に修士課程へ入学し、さらに博士後期課程へと進んで学位を取得されました。講演では博士論文の具体的な章立てを説明されましたが、学費を稼ぐために韓国語の講師をしたことや毎日スーパーのサニーで唐揚げを揚げるアルバイトをした苦労話も聞くことができました。



(講演をする林(イム)さん)

講演終了後に、現在、韓国のソウルから地球社会統合科学府に留学している在校生のパク君から「日本のキムチの味は甘いので、韓国のキムチが懐かしくなかったですか」という質問が出ましたが、林さんはそういう感じはしなかったということでした。そのやりとりを聞いて、私は本場のキムチの味を知りたくなりました。



(波瀾先生の報告会)

卒業生3名の講演が終了した後は、2023年9月までアメリカで1年間の海外研修を行っていた波瀾先生によるハーバードイェンチン滞在報告です。アメリカの物価は高く、フィッシュバーガー1個が3000円もすると聞いて驚きました。インフレ抑制のためFRBが金融の引き締めを行っていることもうなずけます。滞在中のボストンは1年の半分は冬のような気候で、プリザードで休校になったことが何回もあったとのこと。滞在中のノルマであるトークの話、研究分野が異なる訪問研究者との交流やハーバード大学の授業の様子を具体的に語ってもらいました。ハーバード大学の授業では、教師も学生も相当な準備をして臨んでいることを聞いて、そのすごさに感嘆しました。

交流会終了後、博多駅近くの「さかな市場」というお店で懇親会を行いました。地球社会統合科学府設立10周年企画として卒業生を招いて交流会を行い、さらに懇親会で親睦を深めたことは実りが多く、有意義なものになりました。



(集合写真)

水共生学活動報告「ラムサール条約釧路会議30周年記念シンポジウム」および霧多布湿原巡検(バスツアー)

藤岡 悠一郎

(地球社会統合科学府・包括的生物環境科学コース)

水共生学プロジェクトでは、北海道東部の釧路湿原とその周辺地域を共同フィールドの一つに設定した。それには大きく二つの理由がある。一つは、自然の原理で成立している湿原と人間の居住域との地理的な距離が近く、「ゆらぎ」という水共生学の概念を考える場所として適しているためである。もう一つの理由は、湿原は放っておくと自然に埋まってゆき、やがて湿原でなくなってしまうので、湿原として維持するには人間の役割が大きいためである。このような釧路湿原を将来どうしていくのかについて、次世代を担う子どもたちと市民、研究者がともに考えるため、2023年9月24日(日)に釧路市生涯学習センターで「ラムサール条約釧路会議30周年記念シンポジウム」を開催した。

シンポジウムのタイトルは、「どうする釧路湿原?～未来への提言～」であり、主たる対象は、釧路の次世代を担う若者である。午前10時、蛭名大也氏(釧路市長・釧路国際ウェットランドセンター理事長)の開会の挨拶で幕を開けた。午前中の第一部では、小・中・高校生たちが総合学習の時間などで釧路湿原やそこに住む生き物、人間との関係などを調べた学習成果の発表会を実施した。例えば、湿原に生育するヒメカイウという植物がなぜ赤い実をつけるのか、ミゾソバは食べると美味しいのか、なぜ釧路湿原は大事なのかなど、素朴な疑問を熱心に調べた結果や、海洋ゴミを減らすために学校全体で取り組んでいる活動の紹介など、内容は多岐に及んだ。4名のコメンテーターが発表に対する意見をのべた。そのうちの一人は、竹下綾音氏(九州大学

地球社会統合科学府修士1年)である。竹下氏は水共生学の環境教育調査に参加し、7月に釧路市立小学校で釧路湿原に関する授業を複数回実施した。そのときの知見や自身の研究活動の経験からコメントを行った。

いずれも大変興味深い発表であったが、中でも標茶高校のグループによる発表は専門家を唖らせる内容であった。近年、社会問題となった“忍者ぐま”OSO18をテーマとした研究である。彼らのグループは、OSO18のイメージがメディアなどによってつくられた虚像である点を指摘し、OSO18と平均的なヒグマの特徴などを実際のデータで比較しながら説明し、OSO18が肉を好むようになった一因として、狩猟の残渣を廃棄した人間にも責任があるのではないかと考察した。そして、ヒグマとの付き合い方について、完全に駆除してしまうのではなく、共存の道を考え続けることの重要性を将来の展望として述べた。

午後の部では、2件の基調講演と3件の水共生学の成果発表を実施したのち、総合討論を行った。最初の基調講演は新庄久志氏(釧路国際ウェットランドセンター)による「「釧路会議」が地域を変えた」という内容で、釧路湿原の歴史的な歩みを振り返り、未来への展望を述べた。続いて、中村太士氏(北海道大学)が「気候変動と釧路湿原の保全」というタイトルで講演を行い、釧路湿原の環境の変遷や湿地再生の取り組みについて紹介した。

水共生学の成果発表では、荒谷邦雄(九州大学)が「釧路湿



標茶高校の生徒による発表



総合討論の様子

原における人と自然の共生」と題し、昆虫の視点から釧路湿原の貴重さを説明し、その湿原が大きく変化しつつあることを指摘した。渡部哲史（九州大学）は「釧路湿原の過去・現在・未来～水共生学の観点から～」というタイトルで、将来の釧路がどのような気温になるかをシミュレーションの結果を示しながら説明した。最後に、木附晃実（九州大学）が「釧路市の小学生を対象とした湿原の環境教育の実施」という題で、釧路市立小学校を対象に実施した環境教育のプロジェクトについて説明した。その際、実施したアンケートの中で、釧路市の小学生の半数近くが「釧路湿原を訪れたことがない」と答えたことを紹介した。

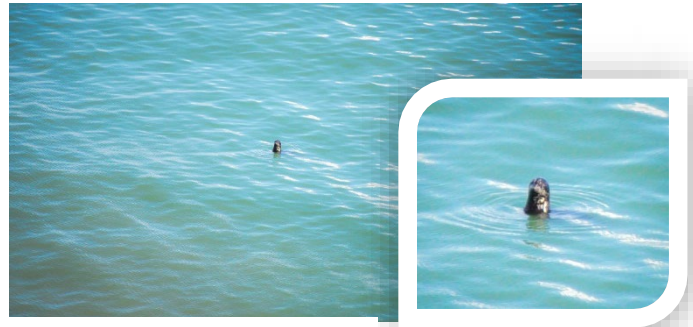
総合討論は、参加者からいただいた質問に回答する形で進行了。討論では、ラムサール条約への加盟が決まった当時と比べて市民の熱量は変化したか、湿地の保全や利用において行政と市民がどのように連携すればよいのかなどの点について意見を交わした。総括としてモデレーターの鬼丸武士（九州大学）から、将来の世代にいまの釧路湿原を引き継ぐため、人間がどのように湿原に関わっていくべきであるのか、考え続けていかなければならないとの指摘があった。最後に、閉会の挨拶を阿部義孝氏（釧路市教育委員会教育長）が務めた。挨拶の中で、午前中から夕方までの長時間にわたる、きわめて内容の濃いシンポジウムであったという感想を頂いた。午後の部には前半で登壇した生徒も数名参加しており、世代を超えて「未来への提言」を考える機会となった。ラムサール条約釧路会議から30周年の記念シンポジウムに相応しい充実した内容であった。

霧多布湿原巡検（バスツアー）報告

シンポジウムに先立ち、2023年9月23日（土）に霧多布湿原を対象とする巡検（バスツアー）を実施した。この巡検の目的は、釧路市に居住し、釧路湿原に馴染みのある若者世代に、少し離れた場所にある霧多布湿原を案内し、比較の目を持って湿原を見てもらうことであった。



霧多布岬とバスツアー参加者



海上のゼニガタアザラシ

バスツアーには、水共生学の関係者以外に7組13名（子ども10名、保護者3名）が参加した。当日、朝9時に釧路市立博物館を出発した。まず、霧多布湿原の南にある琵琶瀬展望台から湿原の全体像を観察した。霧多布湿原は、釧路湿原東部の厚岸郡浜中町に位置する国内5番目の広さを有する湿原である。加藤ゆき恵（釧路市立博物館）から、霧多布湿原は釧路湿原より面積が小さく、コンパクトにまとまっていることや植生の特徴などについて説明があった。

次に、湿原の東側に位置する霧多布岬から、風の影響を受けて形成された風衝植生や海に生息する生き物を観察した。この日は、運よくラッコとゼニガタアザラシを観察できた。その後、霧多布湿原センターに移動し、湿原内に整備されている木道に沿って湿原の環境や植物、昆虫などを観察した。また、バケツで湿原の水を汲んでサンプルとし、色でpHや硬度などが判別できる簡易検査キットを用いた水質調査を行った。渡部哲史（九州大学）が水質を調べる方法を説明し、湿原の水とミネラルウォーター、沖縄県石垣島の水などのサンプルを比較し、参加者全員で霧多布湿原の水の特徴を調べた。一目で水の違いがわかるため、子どもたちも楽しそうに調べていて、植物の腐食によってpHが低くなる湿原の水の特徴を理解していた。天気と幸運に恵まれ、湿原に親しむ機会となる巡検であった。

「水共生学」webページ：<https://mizu-kyosei.net/>



簡易水質調査キットでの検査

水共生学 一般公開企画の開催 「石垣島未来ワークショップ・水共生学セミナー」

渡 部 哲 史

(地球社会統合科学府・包括的東アジア・日本研究コース)

(比較社会文化研究院 環境変動部門)

科研費・学術変革領域A・水共生学では、水循環に関する地域課題に対して、地域の実態に即した解決方法および将来像を提案することを目的として研究を進めている。その具体的な対象地域の一つが石垣島である。

石垣島は固有の生態系や景観、特徴的な文化を有し、それらを基にした農業や漁業、観光業が地域の主要な産業となっている。そのような石垣島において気候変動に伴う水循環の変化、さらに最近の観光業や農業を取り巻く環境の変化は流域の生態系や景観、地域文化に様々な影響を及ぼし得ると考えられる。これらの変化の下でどのように持続可能な発展を達成するかを研究することは、石垣島はもちろん、同様の課題に直面している太平洋島嶼地域にも重要である。

以上の背景のもと、水共生学では水循環の観点から石垣島における将来像を描くことに取り組んでいる。将来像の描き方には、過去のデータをもとに現在を基点として将来像やシナリオを推定する手法（フォアキャストリング）と、将来のあるべき姿から現在の社会課題を照射する手法（バックキャストリング）が存在する。水共生学ではバックキャストリングにより石垣島における持続可能性を描こうとしている。

気候変動の予測など、自然科学分野においては従来からフォアキャストリングによる予測が行われている。一方で、バックキャストリングに関しては将来のあるべき姿という主観を含む分析を行うことから、その実践例はフォアキャストリングに比べると限られている。また、あるべき姿の検討は研究者のみではなく住民やステークホルダーといった研究者以外の参加も必要となり、学際的なアプローチが求められる。ゆえに、学際的なアプローチを重視する水共生学として取り組む意義の大きなアプローチである。

今回、バックキャストリングにより石垣島の将来像と関係する現在の社会課題を抽出するための試みとして、住民参加のワークショップ「水共生学 石垣島未来シナリオワークショップ」（以降、WS）およびその結果を報告する「水共生学セミナー」を2023年10月15日に石垣市民会館にて開催した。開催に際しては石垣市および石垣市に拠点を有する国立研究開発法人国

際農林水産業研究センター（JIRCAS）から協力を得た。特にJIRCASからはWSの設計を始め、石垣市のステークホルダーへの案内など多大な協力を得た。

WSの参加者は石垣島に居住もしくは仕事に従事している公務員（国、県、市）、会社員、自営業、農業従事者、高校生（6名）の計19名である。WSに引き続き開催した水共生学セミナーは石垣市のイベント案内Lineなどを通じて広く周知し、当日は会場の席がほぼ埋まる100名近くの参加者を得て盛況を博した。

今回のWSの特徴的な点として、高校生の参加とグラフィックファシリテーション手法の採用がある。多様な属性や背景を有する住民の希望を反映させた将来像を描くには、各年齢層の意見を偏りなく抽出し、異なる世代が協働しながら将来像を検討していくことが重要である。そこで、今回のWSでは高校生を参加者に含め、高校生の意見が議論に及ぼす影響や、高校生自身が議論を通じてどのような変化や気づきを得られたかについて分析を進める事とした。

もう一つの特徴であるグラフィック・ファシリテーションとは、ディスカッションの内容をリアルタイムに絵に書き起こすことで



セミナーのチラシ

議論を可視化し、思考の整理を促す手法である。グラフィック・ファシリテーションを用いることにより話の内容がその場で可視化される。これにより発言内容が流れて消えていく心配がない。また、誰が話したかではなく、何を話されたかが記録されるために意見が属人化せず、本音を声に出しやすい。本WSではこのグラフィック・ファシリテーション担当者を4名配置した。

これら2つのWSの特徴は想定以上の効果を発揮し、WSの議論は大きな盛り上がりを見せた。参加者からも総じて高い参加満足度を得ることができた。高校生とそれ以外の参加者は相互に、普段あまり話をしないグループとの話し合いから刺激を得ていたようであり、そこからの気づきが得られたという感想も寄せられた。また発言内容がその場で図化されるグラフィック・ファシリテーションは「絵本のように」との感想が表す通り、未来を楽しく描いていくという点において議論を盛り上げる役目を大いに果たした。各グループからそれぞれ特徴のある将来像が得られたので、この結果を基に水共生学の観点からの分析を進めていく予定である。

WSの後に開催された水共生学セミナーではWSで完成した絵と共に、得られた未来像やそこに至るための課題を報告した。また、水共生学やその関連研究が石垣島で取り組んでいる内容として、領域代表の荒谷邦雄氏より水共生学プロジェクトの紹介、菅浩伸氏からはサンゴ礁をはじめとする海域の自然とリゾート開発に関して、嶋田奈穂子氏からは湧水を例とした水環境知に関して、大澤和敏氏からは農業工学の観点から陸と海とのつながりに関して、安西俊彦氏からは石垣市に拠点を有する国際農林水産業研究センターが取り組む資源循環システム開発に関してそれぞれ紹介があった。

今回の規格では午後のみという限られた時間でWSおよびセミナーの両方を実施したため、両方の企画に対して時間が不十分であり、この点の改善を期待する声が寄せられた。開催時間をはじめとする改善点はあるものの、今回の企画からは研究の推進という観点からも、研究成果の発信や還元という点からも大きな手ごたえを得られた。この方法やその結果を活用する方法をさらに検討していきたい。



アイスブレイクで話題提供する荒谷領域代表



グラフィック・ファシリテーションの様子



グラフィック・ファシリテーションにより作成された議論のまとめの例



セミナーでの講演(宇都宮大学 大澤和敏教授)

未来共創リーダー育成プログラム 令和5年度授業の紹介

佐藤 敦郎・荒谷 邦雄

(未来共創リーダー育成プログラム)

(比較社会文化研究院)

未来共創リーダー育成プログラムは、高度に幅広い専門性から未来社会を構想し、オールラウンドな協働課題解決と決断、政策の立案と設計にあたることのできる研究者および高度専門職業人を養成することを目的とした大学院プログラムです。副専攻型の学府横断的なプログラムで、地球社会統合科学府、人間環境学府、システム情報科学府、医学系学府、工学府及び生物資源環境科学府が連携して実施しています。学生募集は4月と10月の入学時に行っており、上記の学府の学生のみが応募できます。本プログラム学生は、所属学府での研究に加えて、さまざまな現場の課題解決を行う実践的な研究を行い、それにもとづいて修了証明が得られます。

本プログラムの初年度である令和3年度は、修士課程の学生3名、博士後期課程の学生4名、2年目である令和4年度は、修士課程の学生8名、博士後期課程の学生3名、3年目である令和5年度4月には、修士課程の学生5名、博士後期課程の学生3名が入学しました。また、令和5年度は初めて10月入学者として、博士後期課程の学生1名を迎えることもできました。また、令和5年3月には、初めての修士課程の修了生2名ができました。

全てのプログラム学生は、課題研究プロジェクトIとII、課題探究チュートリアルを履修します。修士課程の学生は、これらの科目に加えてポリシーアナリシス、地球社会フィールド調査法、プログラム連携ゼミ、レクチャーシリーズを履修します。また、博士後期課程から本プログラムに編入した学生は、プログラム連携ゼミを履修します。以下では、主に令和5年度に実施した授業や本プログラム主催のセミナー等について紹介します。

課題研究プロジェクト I

課題研究プロジェクトはIとIIからなり、協働課題解決(Problem Based Learning)型の授業を通じて、課題解決に必要な知識や技法を実践的に習得し、その解決に資する制度設計や技術支援等に関して議論をします。

春学期に開講した課題研究プロジェクトIでは、令和3年度、4年度と同様に、災害対応カードゲーム教材「クロスロード」の手法を用いて、プログラム学生がプログラムに入学する際に提出した課題を素材に、ジレンマが生じる場面を想定して問いを作成することによって、各自の課題を深め、課題解決に必要な知識や技法の習得を図りました。

課題研究プロジェクト II

秋学期に開講した課題研究プロジェクトIIは、福岡県糸島市での授業と広島県での授業からなります。糸島市での授業は、

糸島市の農業が抱える課題(ブランド政策を含む)を事例に、その解決方策を考えました。第1回目の授業(10月27日)では、糸島市の職員2人から農業や農家の抱える課題、糸島のブランド化について座学スタイルで学びました。第2回目の授業(11月2日)では、実際に糸島市の農家を訪問して話を聞き、課題への理解を深め、解決方策を探りました。学生が考えた解決方策はレポートにまとめ、糸島市職員に報告しました。



糸島市の農家から話を聞く学生と教員

広島県での授業(11月24日～26日)は、広島県(主に東広島地域)が抱える水害に関する解決方策を考えました。まず上根峠で河川争奪によって形成された異なる断層を確認し、その後温井ダムを訪ね、資料館やダム地下部の見学を通してダムの働きや種類、水力発電の方法、水害時のダムの役割等を学びました。



広島市豪雨災害伝承館で館長の松井さんの話を聴いている学生

また、広島市豪雨災害伝承館では水害発生や復興(行政・住民それぞれの取組)、被災者による語り継ぐ活動、教訓を活かしたまちづくり、被災者の心のケア等様々なお話を伺いました。さらに東広島市内のため池を見て回り、水害時のため池がどの

ように機能しているかを実地で考えました。水害が多い地域における防災活動を学ぶだけでなく、水害対策がもたらす生物多様性の喪失など幅広い視野を通してフィールドを見ることの重要性をも学びました。

ポリシアナリシス

春学期に開講したポリシアナリシスは、国や地方自治体の政策だけでなく、国際機関やNGO等のポリシーを含む広い意味での政策に関してその策定や意思決定のプロセスに関わる実践的な問題を学びました。各々のプログラム学生が設定した課題をもとに、政策を作成して、政策の比較分析を行いました。そして、策定した政策を首長や上司に見立てた教員に対して、プレゼンテーションをして、説得を試みることで、政策策定の意思決定プロセスを疑似体験しました。

学生が策定した政策案の事業名は、次のとおりです。

- ・「虹の松原」持続的維持管理事業
- ・北九州市民カレッジ拡充事業
- ・異民族間和解プロジェクト
- ・植物由来の航空燃料開発・利用促進事業
- ・インクルーシブ教育推進事業
- ・島内の人と島外の人との交流促進事業
- ・特定外来生物アライグマに関する防除促進事業

課題探求チュートリアル

令和5年度は、様々な課題探究チュートリアルが実施されました。そのうちの1つとして、令和4年度から取り組んでいる武雄市未来共創ラボ（以下、武雄ラボ）をもとにしたチュートリアルがあります。佐賀県武雄市と本プログラムの実施学府の1つである地球社会統合科学府が連携協定を結んでおります。この連携協定をもとに、令和4年7月に、市と本プログラムとは、市や市民が直面する課題を協働して解決をするための政策立案、実証実験（試行）等を行う場として、武雄ラボを設置しました。武雄ラボのメンバーは、本プログラムの学生、教員と武雄市市民協働課の職員、選抜された武雄市の職員です。

令和5年度の武雄ラボは、全5回のワークショップからなり、令和5年9月3日に武雄市武内町で実施された防災訓練に参加しました。また、令和6年1月25日に、武雄市長も参加して、活動報告会と講演会を実施しました。

武雄ラボの日程・テーマ・講師等一覧

回・日	テーマ	講師等
第1回 7月19日 (水)	講演会 「災害と向き合う～地域力・学校力を活用して～」 ワークショップ「災害後にどんなことが起こり、それにどう対応するかを時系列で考える」	防災教育学会 会長 諏訪 清二氏
第2回	武内町でのフィールドワーク	武雄ラボメンバーによる活動
その1 8月2日 (水)	東梅野区（森の木地区、長谷地区、福和地区）でのヒアリング、現地調査	
その2 8月8日 (火)	梅野区（鯉淵地区、海正原地区）でのヒアリング、現地調査	
その3 8月17日 (木)	上古賀地区でのヒアリング、現地調査	
第3回 8月30日 (水)	ワークショップ 「防災訓練のリハーサル」 (オンライン)	武雄ラボメンバーによる活動
第4回 9月3日 (日)	武内町東梅野区、梅野区、上古賀地区の防災訓練に参加	武雄ラボメンバーによる活動
第5回 9月26日 (火)	防災訓練の振り返り、ツールの見直し、まとめ	武雄ラボメンバーによる活動
活動報告会と講演会	活動報告会	武雄市長 小松 政氏 兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 青田 良介教授
1月25日 (木)	講演会 「防災と地域コミュニティ～地域の活性化と人材の活用を考える～」	同 青田 良介教授



第1回武雄ラボ:防災教育学会会長 諏訪清二氏によるワークショップ



第4回武雄ラボ:武雄市上古賀地区の防災訓練で、防災マップを作成する住民と進行役を務める武雄ラボのメンバー

〇〇〇 アクティビティ

与那国島実習(12月15日～18日)では、与那国島が抱える課題の解決方策について学生が各々考えを深めました。島の急変する天候や航空機の欠航などイレギュラーな事態にも遭遇しましたが、島での厳しい生活の側面を学ぶ良い機会になりました。

実習の初日は2グループに分かれて小学校と診療所を訪ねました。小学校では読書会を見学し、診療所では離島医療の課題について学びました。

2、3日目は、与那国島の主要産業である観光、農業、漁業についての現状や課題をお聞きし、泡盛や海塩などの地元名産品の工場も見学しました。また、与那国島など沖縄県の離島が抱える教育現場の課題について伺い、与那国島の歴史や独自の伝統文化も学ぶことができました。

自然と共に生きる与那国島の豊かな自然環境も肌で体感することができました。日本最大の蛾で県指定天然記念物のヨナグニサン(アヤマハビル)をはじめとする与那国島固有種などの貴重な標本資料も見学しました。ジオパーク候補地や希少種保全のための休耕田ビオトープも視察しました。

現地2泊3日という短期間の実習でしたが、実際にフィールドに足を運び、五感全てで学びを得ることができた貴重な機会となりました。



役場やJA関係者から与那国島の産業に関する話を聞く学生と教員



与那国町立図書館で島の伝統行事の写真展を見学する学生と教員

レクチャーシリーズ

レクチャーシリーズは、現実の社会で起こっている問題の解決を目指して、研究活動を展開している研究者、実社会で活躍する実践家、先導的見解を表明しているオピニオンリーダーなど、第一線で活動する学内外の講師を招へいし、講師による講演、学生間および学生と講師間の討論を主体としたセミナー形式のレクチャーあるいはワークショップからなります。参画する各学府で開催されるシンポジウムやワークショップ等のほか、本プログラムが企画して主催、共催するものがあります。

以下は、本プログラムが令和5年度に主催、共催したものを紹介します。(原稿掲載の都合上、一部、令和4年度開催分を含みます。)

未来共創セミナー「ラオスの災害リスク管理とその課題—日本の経験は役立つか—」(使用言語:英語)

ラオスでは、近年、大雨による洪水、土砂崩れなど多くの被害がおきています。ラオス政府は、令和元年7月に災害管理法を制定しましたが、ラオスの災害リスク管理は、制度と運用の両面で、発展の途上にあると言えます。そのため、令和5年2月10日に、日本の経験をラオスの災害リスク管理に役立てることが出来るかを考えるセミナーを開催しました。

本セミナーでは、最初に、ラオス労働社会福祉省社会福祉局副課長で、筑波大学大学院に留学中のドゥアンサワン ソンバット氏が、ラオスの災害リスク管理に関する政策と法律、日本と比較したラオスの災害リスク管理の課題について講演を行いました。次に、施教教授と佐藤教授が令和4年11月から12月にラオスを訪問して実施した、防災教育や行政支援分野での日本の国際協力の可能性に関する調査の結果を発表しました。その後、九州大学のラオス人留学生やプログラム生を交えた議論がなされました。

未来共創セミナー「転換期の日本の食料・農業政策を考える」

令和5年3月1日に、九州農政局次長の小島吉量氏をお招きして転換期の日本の食料・農業政策に関するセミナーをハイブリッド形式で実施しました。食料価格の高騰が叫ばれる中、食料・農業・農村基本法の見直しに向けた検討が行われています。小島氏から多くの統計資料に基づいて、その背景や検討に当たっての視点、今後の政策の方向性などについて、丁寧な説明がなされ、参加者とともに議論を深めることができました。

未来共創セミナー「政策にエビデンスは必要なのか」

政策立案におけるエビデンスの重要性が増す中、令和5年5月20日に、エビデンスに基づく政策形成(EBPM)の第一人者である岩手県立大学講師の杉谷和哉氏によるセミナーをハイブリッド形式で実施しました。杉谷氏は、米国や英国のEBPMとの比較、EBPMに関する理論、実際の事例を通じて、日本のEBPMの特徴について説明をされました。

セミナーには多くの地方公務員や国家公務員が参加し、「科学志向型EBPM」と「実用志向型EBPM」の区別など、分かり易い解説が好評でした。

未来共創セミナー／九州大学経済学府リサーチワークショップ関連セミナー「ウクライナ復興の支援に向けて～時代のニーズに即した欧州復興銀行（EBRD）のこれまでの取組みを踏まえて～」

令和5年6月21日に、欧州復興銀行東京事務所の対外連携ヘッドの森島洋子氏と同行銀行部門インフラ・チームのアソシエイト・バンカーである久米可織氏によるセミナーを実施しました。欧州復興銀行のなりたち、日々の業務、ウクライナ復興に向けた支援内容のほか、国際金融機関へのキャリア・パスについても説明がありました。当日は、約150人の学生が参加し、学生との質疑応答が熱心に行われました。

令和5年度未来共創リーダー育成プログラムシンポジウム
「未来社会を共創するために必要な教育とは？」

～分野横断型副専攻プログラムの挑戦～

令和6年1月27日に地球社会統合科学府、および人間環境学府と共催で令和5年度の未来共創リーダー育成プログラムシンポジウムを開催しました。本シンポジウムでは、愛媛大学の治多伸介教授による「愛媛大学における地域連携/社会人リカレント教育の展開」、大阪大学の池道彦教授による「大阪大学における『総合知』人材育成の仕組みづくり～学際融合・社会連携を指向した双翼型大学院教育システムのご紹介～」の2件の基調講演と、4件の事例報告に基づいて、未来社会の共創のために大学や企業が実施している先駆的な取り組みをご紹介いただきました。ご登壇者が一堂に会したパネルディスカッションでは、未来社会の共創に真価を発揮する人材を育成するための教育の在り方やその振興のために本プログラムをはじめとする分野横断型の副専攻プログラムが挑戦すべき具体的方策について熱心な議論が交わされました。また、会場では本プログラム生による活動報告ポスターセッションも開催されました。

大変多くの方にご来場いただけた今回のシンポジウムは学内に広く本プログラムの活動を知っていただく大変良い機会になりました。ご来賓やご登壇いただ方を初め、開催にあたってご尽力いただいた多くの関係者の皆様に改めて厚く御礼申し上げます。



パネルディスカッションでの議論の様子



ポスターセッションの様子

以上のように本プログラムでは、幅広い専門性にもとづいて現場課題の発見と分析を行い、その解決に向けて政策提言を行うために必要な力を養う、多様な授業を準備しています。

既述のとおり、学生募集は、毎年4月と10月の入学時に行っております。ご関心のある学生は、入学説明会に参加してみてください。また、本プログラムが主催、共催するレクチャーシリーズは、プログラムの学生以外の方々にも公開しているものが多くあります。未来共創リーダー育成プログラムのホームページで確認してみてください。

ぜひ皆さんも一緒に、明日を切り開くリーダーを目指して実践的な学の営みに挑戦しましょう。

博士論文を書き終えて1年

岡 祐 輔

(糸島市役所経営戦略部)

地球社会統合科学府博士後期課程を2023年3月に修了し、早いもので、約1年が経過しました。在学中から現在まで、様々な環境変化があり、本稿で報告させていただける貴重な機会をいただき、感謝申し上げます。

私は自治体職員として、地域の成長・発展に関心があり、経済地理学に惹かれ、研究分野として選択しました。産業集積や人材の移住、観光、交通、環境など、地域のことであれば幅広く対象にできることが大変魅力です。阿部康久先生が中国の産業集積や移民労働者を対象に研究をされていたので、私は、観光産業において、移住先の地域で起業したり、その地域にない新しい活動を起こしたりするような人材が、なぜその地域に多く引き寄せられ、その地域が経済発展していくのかをテーマに博士論文の執筆に挑みました。

これまで社会人としてインタビューやアンケートなど実地調査は何度も実施してきましたが、その結果を学術的に利用するとなると、質問や分析の方法は、より深い洞察力、思考力が必要になり、さらに、それらのデータを用いて学会誌（査読誌）へ投稿できるレベルにまで文章を構成していく過程は初めての経験でした。

何度も修正しては、阿部先生に論文を送り、私には無理かもしれないと弱音を吐いてしまうこともありましたが、「大丈夫です。私を信じてついてきてください」という阿部先生の頼もしい言葉に救われ、常に守られた感覚で、最後までやり遂げることができました。

地球社会統合科学府では、査読誌2本への掲載が博士論文予備審査への最低ラインの要件でした。しかしながら、より確実に審査を通したいと考え、私の場合は、査読誌3本の執筆を目指すことにしました。

実は他大学の社会人博士課程の学生と数名、意見交換したのですが、同じ予備審査までに、学内の紀要1本でよい、査読誌1本でよいなどの話を伺い、九州大学と比べ学位が取得しやすい状況がありました。しかしながら、実際に研究者として立ち立つ力をつけるために、同じ期間にそれだけ鍛えてもらえるシステムは、私にとってはありがたいことでした。査読誌1本を作成するだけでも、大量の先行研究を読み、その分野の知識を蓄え、論証するための方法を深く考え、幾日もそのテーマの文章を書き、3年間でこれを3本繰り返すことで培った能力は、今後独自

の研究を推進していく上で、最も大きな果実でした。

このおかげで修了後も、自分で学会誌に投稿し、掲載したり、著書を執筆したりと、学位を取得することではなく、本来の目的である実務に生きる力をつけることができました。また、学位取得後、人材の育成の面では、いくつかの大学で、地域の政策やまちづくりに関する講演活動や講義を担当させていただいています。どこの大学に行っても、会場での学生からの質問や後日のアンケート内容を見て、人生の選択に多少なりとも影響を与える可能性も見え、やりがいを感じています。



(写真:福岡工業大学での講演の様子)

さらに、ご報告になりますが、福岡大学から准教授としての内定をいただくことができました。2024年4月から研究者として、次の夢に向かいます。これも九州大学から授与された学位のおかげですし、その重みを感じながら、新たな環境での研究と教育に臨むことができることを光栄に思っています。

専任教員の初年度であるため、現在は、仕事の傍ら、講義資料の準備に追われていますが、これも私にとっては新たな学びで、楽しめていますし、これからも学び続ける姿勢を大切にしていきます。

研究面でも、地域経済の成長・発展に関する研究をより深化させ、学生たちとの交流を通じて地域社会への貢献を目指します。

3年間ご指導いただきました、阿部康久先生をはじめ、副査として親身にご相談にのってください、宮地英敏先生と藤岡悠一郎先生に心から感謝申し上げます。

地球社会統合科学府 令和五年度 修士課程 修士論文題目一覧

1	近代海運会社の日中比較分析 — 輪船招商局と三菱会社・共同運輸・大阪商船 —
2	戦後日本陶磁器業における中小企業の発展についての考察 — 小石原焼を対象として —
3	Research on the analysis of novel plant pathogens infected to wild asparagus (<i>Asparagus kiusianus</i>)
4	明治期における女性像——女子用漢文教科書の分析
5	中国高等学校における日本語教師研究 — 派遣教師の労働条件の視点から —
6	The Role and Participation of the Tunisian Diaspora in France in Homeland Politics: Drivers, Constraints, and the Influence of Kais Saied's Presidency
7	現代中国メディアにおける結婚の表象——結婚・恋愛バラエティ番組のジェンダー分析
8	液化化する現代における「社交」の可能性——山崎正和の思想に着目して——
9	ストラスフィールド市の多文化主義政策を検討する — 連邦や州との連携を交えて —
10	1960年代から80年代までの沖縄観光業の分析 — 交通業を中心として
11	難民の定住促進のための日本語教育の支援に関する研究 — アフガニスタン避難民を対象として —
12	SMALLHOLDERS IN AGRICULTURAL EXTENSIONS IN A RESOURCES EXTRACTIV REGION
13	外国人生活者の包摂社会実現に向けた持続的な地域マネジメントのあり方 — 横浜・福岡における外国人支援団体などの民間組織の活動比較を通じて —
14	Political Process of Taxing Foreign Digital Players in Indonesia
15	中国の「985大学」における日本語科カリキュラムについて ——卒業生の視点から——
16	観光と慰霊の融合 米軍統治下の沖縄における戦跡訪問
17	古墳時代前・中期における鉄剣の生産・流通とその変遷
18	中華人民共和国における「民族主義」の変遷 ——人民日報の分析を中心に
19	対話型活動における「二者択一の問い」の有効性 — 「オープンクエスチョン」と比較して —

20	トリコデルマ属菌を用いたレタス根腐病の生物的防除に関する研究
21	Assessing the Impact of the implementation of Forest Chief Scheme in State-Owned Forest Farm--- case study in HuangLong Mountain Forestry Bureau
22	日本語学習における学習動機と学習ストラテジーの関係 —中国内陸部の大学の日本語専攻者へのアンケート調査から—
23	日本産クワガタムシ科幼虫の発音器形態の比較及びコクワガタ名義タイプ亜種 <i>Dorcus rectus rectus</i> を用いた 幼虫における発音器の機能解明
24	Population Dynamics of the Stable Fly, <i>Stomoxys calcitrans</i> (Linnaeus) (Diptera: Muscidae) at Cattle Farms in Japan
25	現代社会における弱い紐帯の重要性 —サポートネットワークとしての機能に着目して—
26	A taxonomic study of <i>Aprostocetus</i> (Hymenoptera: Eulophidae) that parasitizes <i>Rhopalomyia</i> (Diptera: Cecidomyiidae) in Japan
27	「躺平（寝そべり）志向」から見た現代中国若者の生活現状と生活意識の変化
28	現代中国語の再帰代名詞“自己”に関する考察
29	市民による民主主義改革の可能性 —— ベルギー市民運動政党「アゴラ」を中心に——
30	中国はなぜ国連 PKO に積極参加するのか：習近平政権の国家安全保障戦略と人民解放軍を中心に
31	和辻倫理学と儒教 —儒教における近代化と伝統の対話と対決—
32	PRECARIOUS LABOR UNDER COVID-19 PANDEMIC COUNTERMEASURES: COPING MECHANISMS VIS-A-VIS CORPORATE STRATEGIES
33	日常交流の場で異文化理解を促進する方策に関する研究 —文化的暗黙知の共有に注目して—
34	古墳時代後期・終末期における玉類の流通・消費形態とその背景
35	島津久光の楽府について—辺塞詩と閨怨詩に着目して—
36	英文の難易度制御における語彙指標と文法指標が学習者の理解度に及ぼす影響
37	The Involvement of Sansha City, Hainan, in the Management of Maritime Militia under the Strategy of Maritime Strong Power: A Study of the Sansha City Fisheries Development Company
38	香港における現代芸術の文化人類学的研究

編集後記

『Crossover』第49号をお届けします。今年(令和5年)度は、地球社会統合科学府が設置されてから10年という節目の年でした。新任教員が6名着任され、学府全体が若返るとともにエネルギー的な人材に刺激を感じさせられます。また、学生4名がそれぞれの研究分野で受賞し、教員4名が著書を刊行した他、未来共創育成プログラムや水共生学の活動ぶりは、学府の成長を反映していると言えます。今後10年以降もさらなる成長が期待されます。

広報・情報化推進委員会 クロスオーバー編集担当：マシュー・オーガスティン

ISGSのロゴの説明



新学府開設にともない、「地球社会」に関するゆるやかに繋がる研究領域を6つのコース、「包括的地球科学」「包括的生物環境科学」「国際協調・安全構築」「社会的多様性共存」「言語・メディア・コミュニケーション」「包括的東アジア・日本研究」に編成しました。このロゴの三角形は、この6つの研究領域を象徴しており、それらが融合しつつ未来へと前進するようすを表しています。ロゴのカラーは、本学府の前身である比較社会文化学府のイメージカラーを引き継いだものです。



ISGS

GRADUATE SCHOOL OF
Integrated Sciences for Global Society

発行者 九州大学大学院地球社会統合科学府
発行年月 2024年3月

〒819-0395 福岡市西区元岡744

TEL : 092 (802) 5786・5787

FAX : 092 (802) 5791

ホームページ : <http://isgs.kyushu-u.ac.jp/>